

第5章 原の辻遺跡出土石器

松尾樹志郎

1. はじめに

本章では、1951、53、54、61年調査出土石器のうち薄片や石核を除いた184点を報告する。これらの石器には表採品や出土位置が不明な資料が多く含まれ、また出土地点が分かっている資料についても遺構内からの出土かどうかの判断は難しい場合が多い。したがって、それぞれの資料に対して正確な時期を与えることは困難だが、全体的な傾向は原の辻遺跡の既往の調査成果と共通する。すなわち、弥生時代前期から中期に一般的に見られる堆積岩系の大陸系磨製石器類と、後期以降に一般的に見られる堆積岩系の砥石、玄武岩を主な素材とする敲石が中心を占める石器組成を示している。特に砥石・敲石が多量に出土している点に関しては同じ壱岐島に所在するカラカミ遺跡の様相とも共通する。

観察表には、各資料の調査年度および石材・法量と、分かるものについては出土地点を記載した。なお、砥石に関しては粒度の指標として、相当する JIS 規格の番号を備考欄に記載しているが、顕微鏡による観察等の詳細な検討は行っておらず、あくまでサンドペーパーとの対比による目安である。

2. 1953年調査出土石器

513～590は1953年の調査で出土した石器である。

513～516は黒曜石製の打製石鏃である。513は基部を両側から剥離して作出した凹基式である。514は凹基式で脚部の片側が欠損している。515も片側の脚部を破損した凹基式で、剥離調整は全体的に粗い。516は基部を作出し全体の形状が成形されているが、細かい剥離調整は施されておらず未成品と見られる。517～519は安山岩製の打製石鏃である。517は脚部の片側が欠損している。518は側縁に若干の剥離調整が見られるのみで、素材剥片から剥離された後の加工があまり施されていない。519は側縁に刃部が形成されていない点や全体的な形態から見て未成品と考えられる。520は黒曜石製で、加工が進んでいないため器種の判別が難しいが、形態から見て石錐とした。

521、522、523は石錘である。521は泥岩製で、長軸方向の溝を持ち、端部にはくびれを形成している。溝の中にわずかに繊維質が残存している。522は泥岩製で、短軸方向の溝が体部に3か所、さらに上端と下端に抉りが施されているが長軸方向の溝は見られない。523は砂岩製の破損品で、上下2か所の穿孔とそれらをつなぐ長軸方向の溝が確認されることから、有孔の大型石錘と見られる。これら3点はいずれも九州型石錘で、下條氏の分類（下條1984）で言えば521は小形A型、522は小型B型に相当し、523は小破片であるものの大形A型にあたと推測される。

524は水晶である。六角柱状の原石で人為的な加工の痕跡は確認されない。

525、526は紡錘車である。525は安山岩製で薄手扁平であり、断面が長方形であることから平尾氏の分類（平尾2008）のⅡa類に相当する。526は砂岩製で、扁平で平面が円形であり、一部研磨されているが、穿孔が施されていないことから未成品と考えられる。

527、528は安山岩製の剥片である。527は何らかの素材を割り出した後の剥片と見られる。528は一部に自然面を残している。

529～531は蛇紋岩製の両刃石斧である。529は基部が狭く刃部が広い平面形態で、大陸系磨製石器

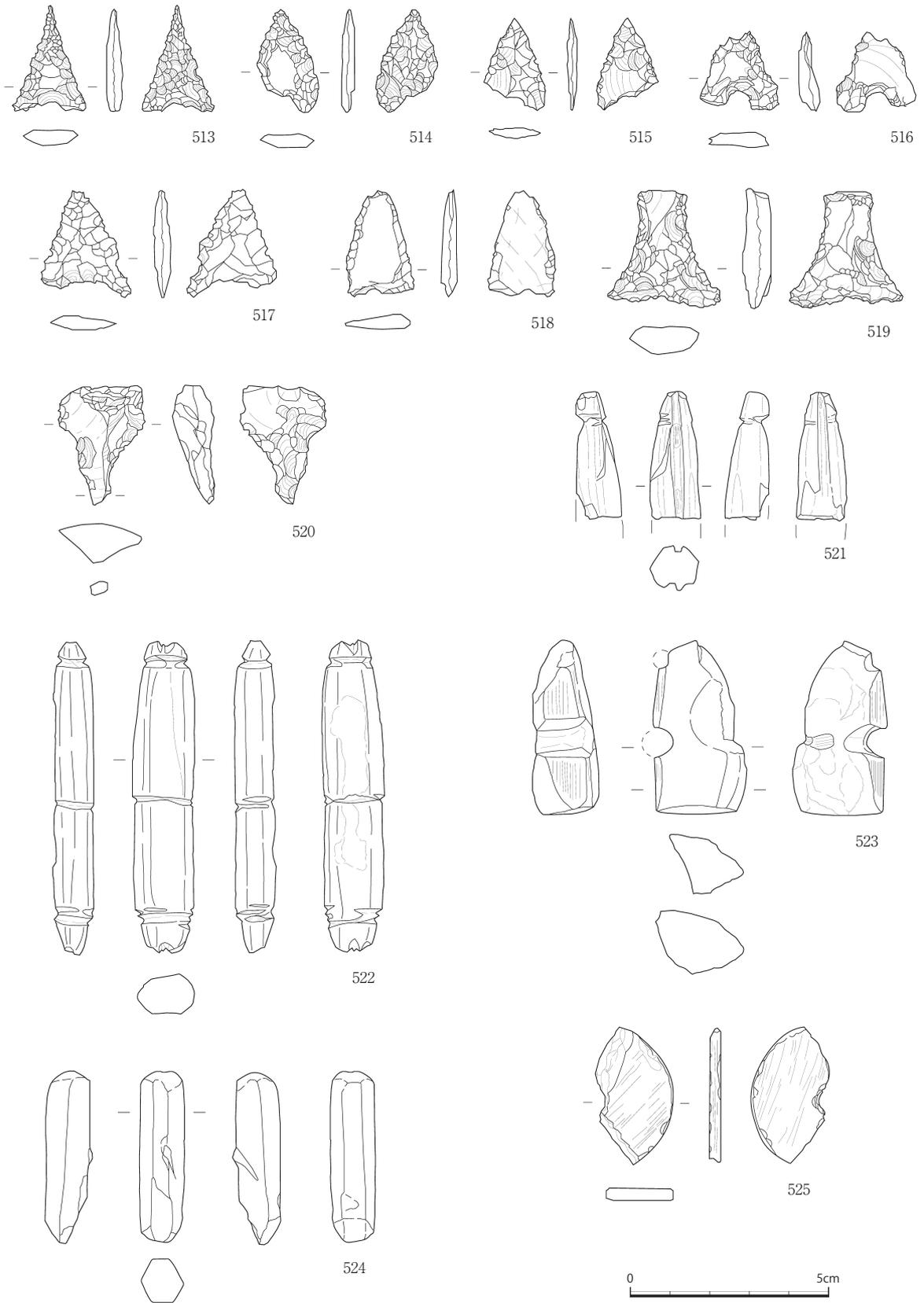


图91 第2次調査(1953年)出土石器(1)(縮尺2/3)

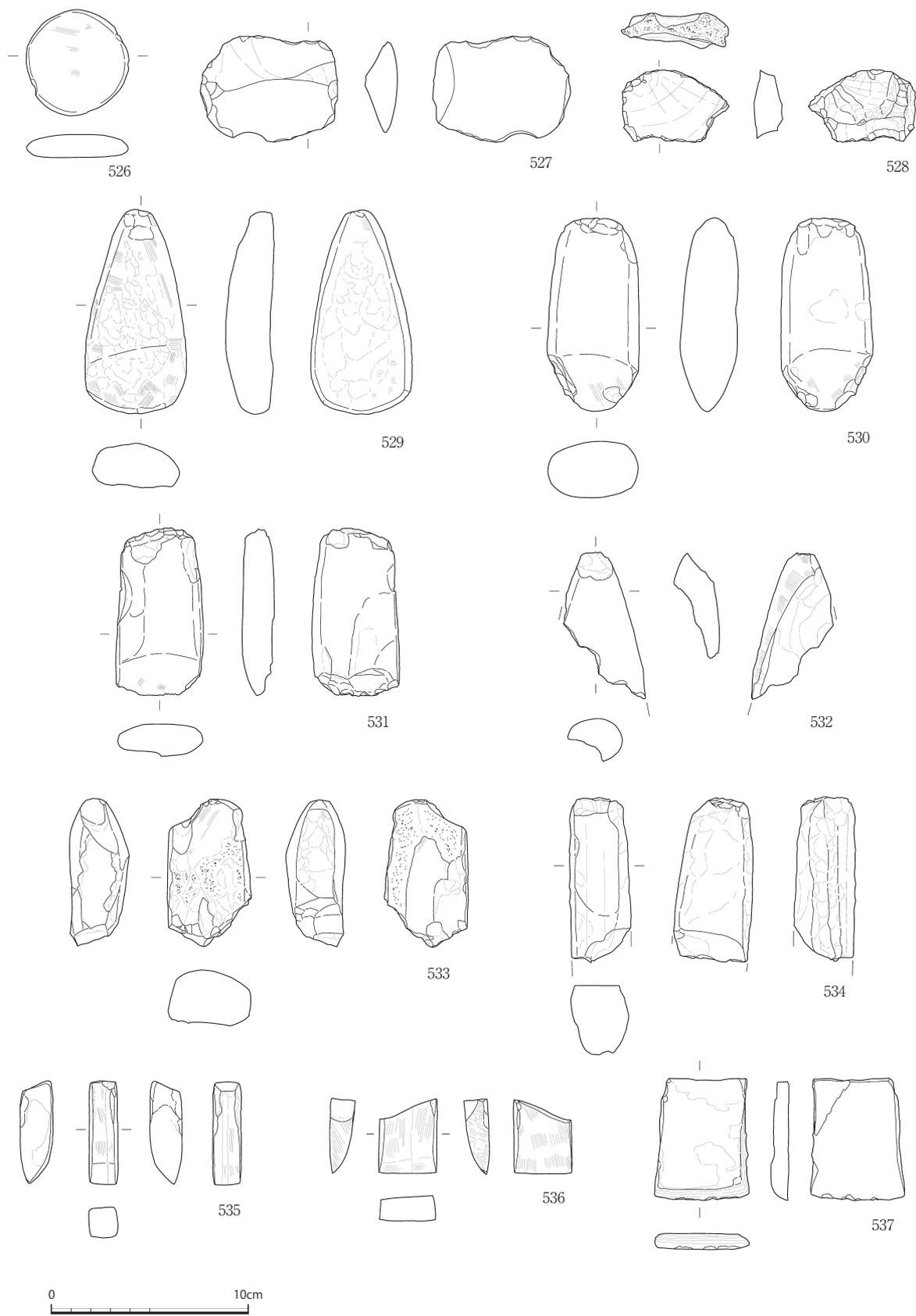


図92 第2次調査（1953年）出土石器（2）

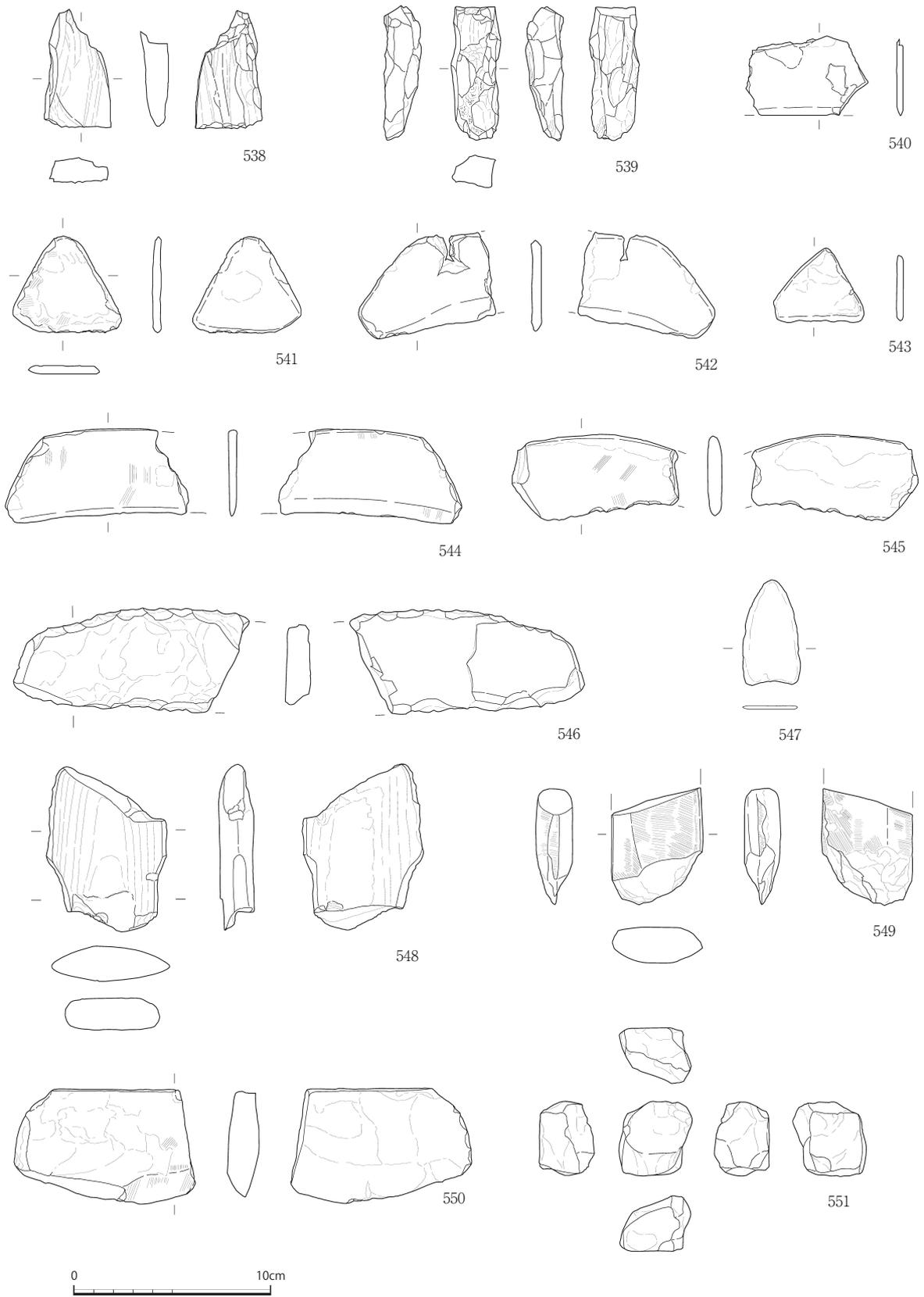


图93 第2次調査（1953年）出土石器（3）

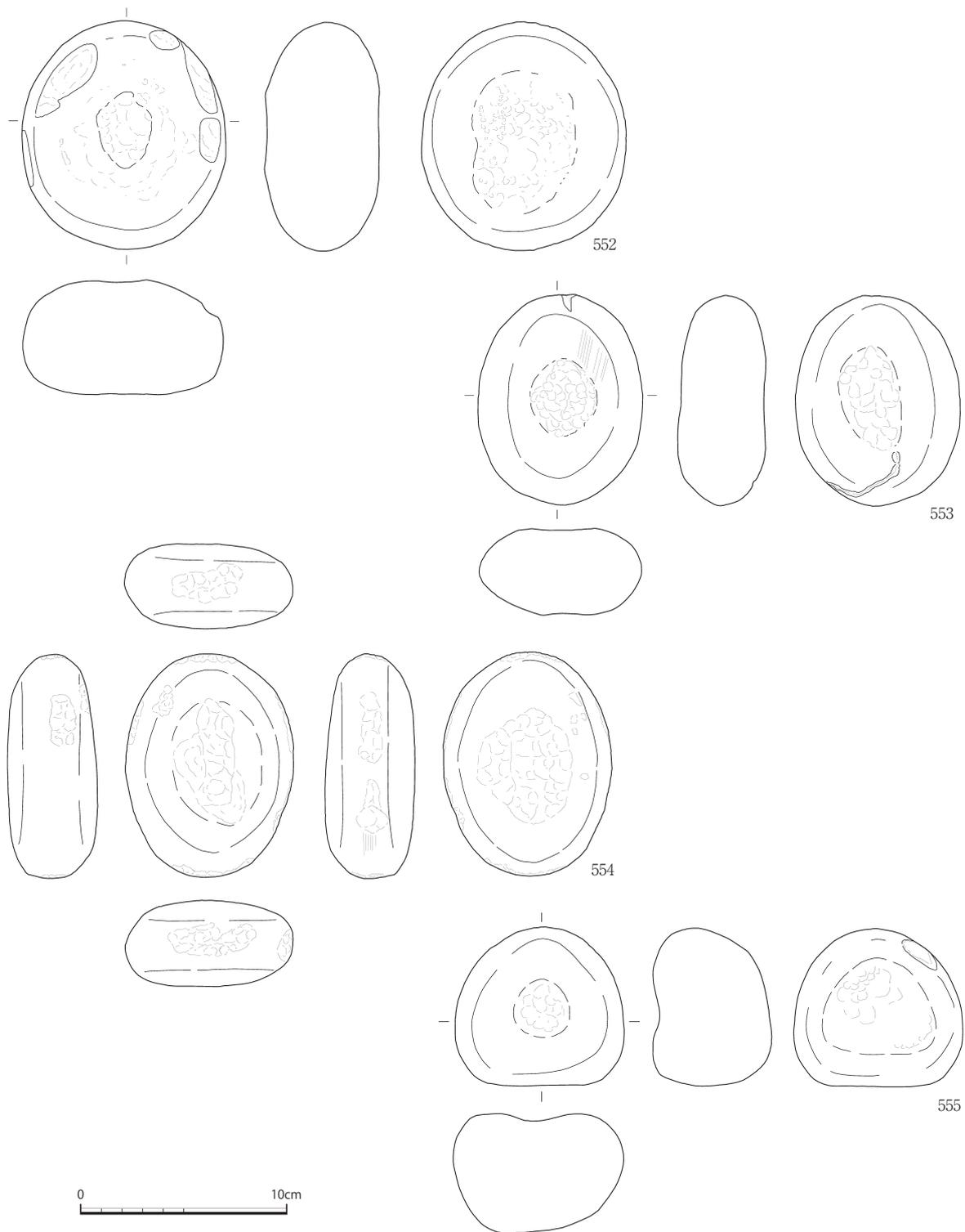


図94 第2次調査（1953年）出土石器（4）

の石斧とは系統が異なる。530は両側縁が若干面取りされており、隅丸四角形状の横断面形を呈する。原の辻遺跡の既往の調査でも類似した形態の石斧が出土している（c.f. 福田・中尾編2005）。531も四角形に近い断面形を呈するが薄手で扁平である。532は玄武岩製の石斧片で、全体の形状は知り得ないが刃部から基部にかけて狭まる平面形態であると考えられる。533～536は層灰岩製の片刃石斧であ

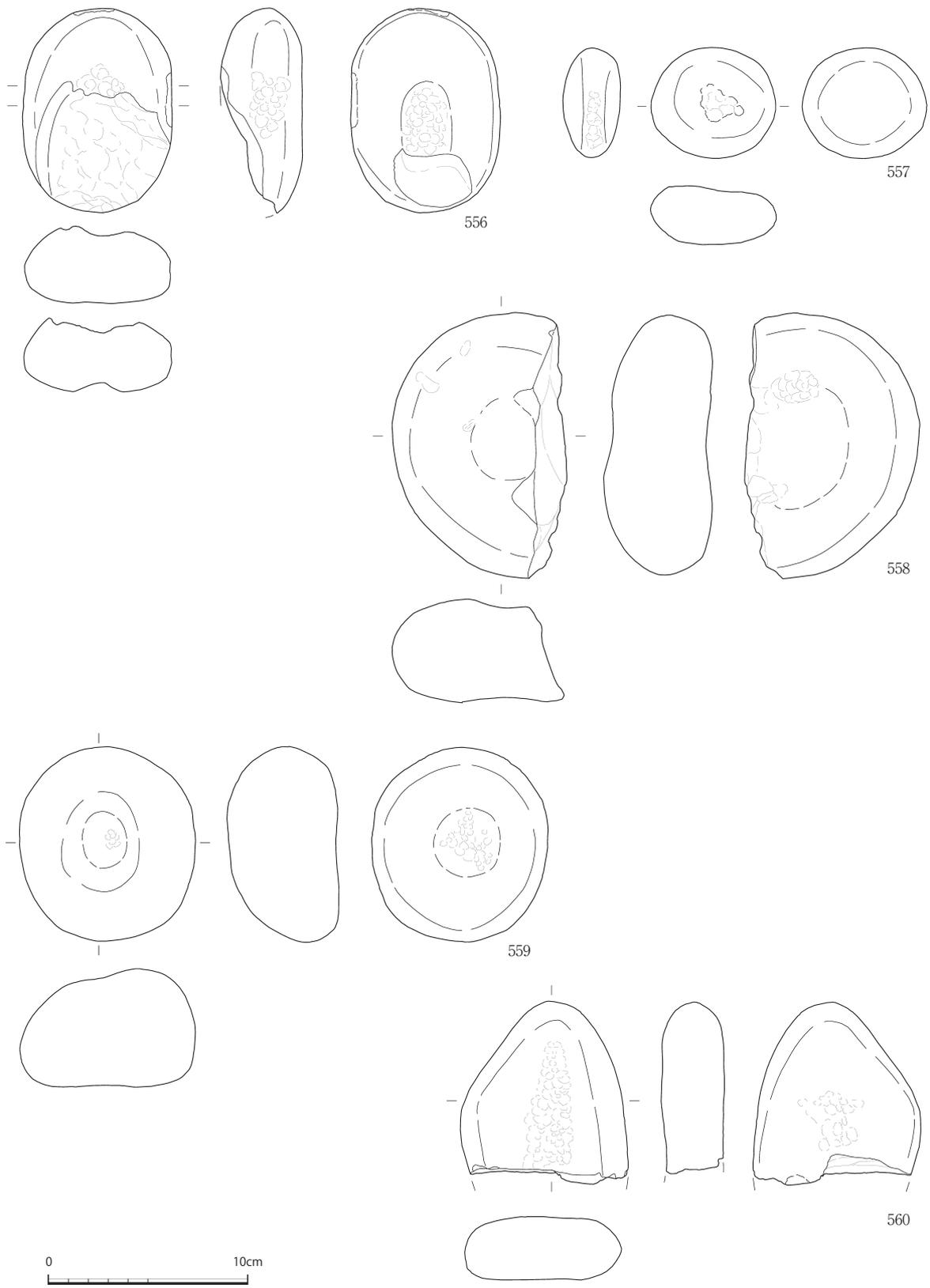


图95 第2次調査（1953年）出土石器（5）

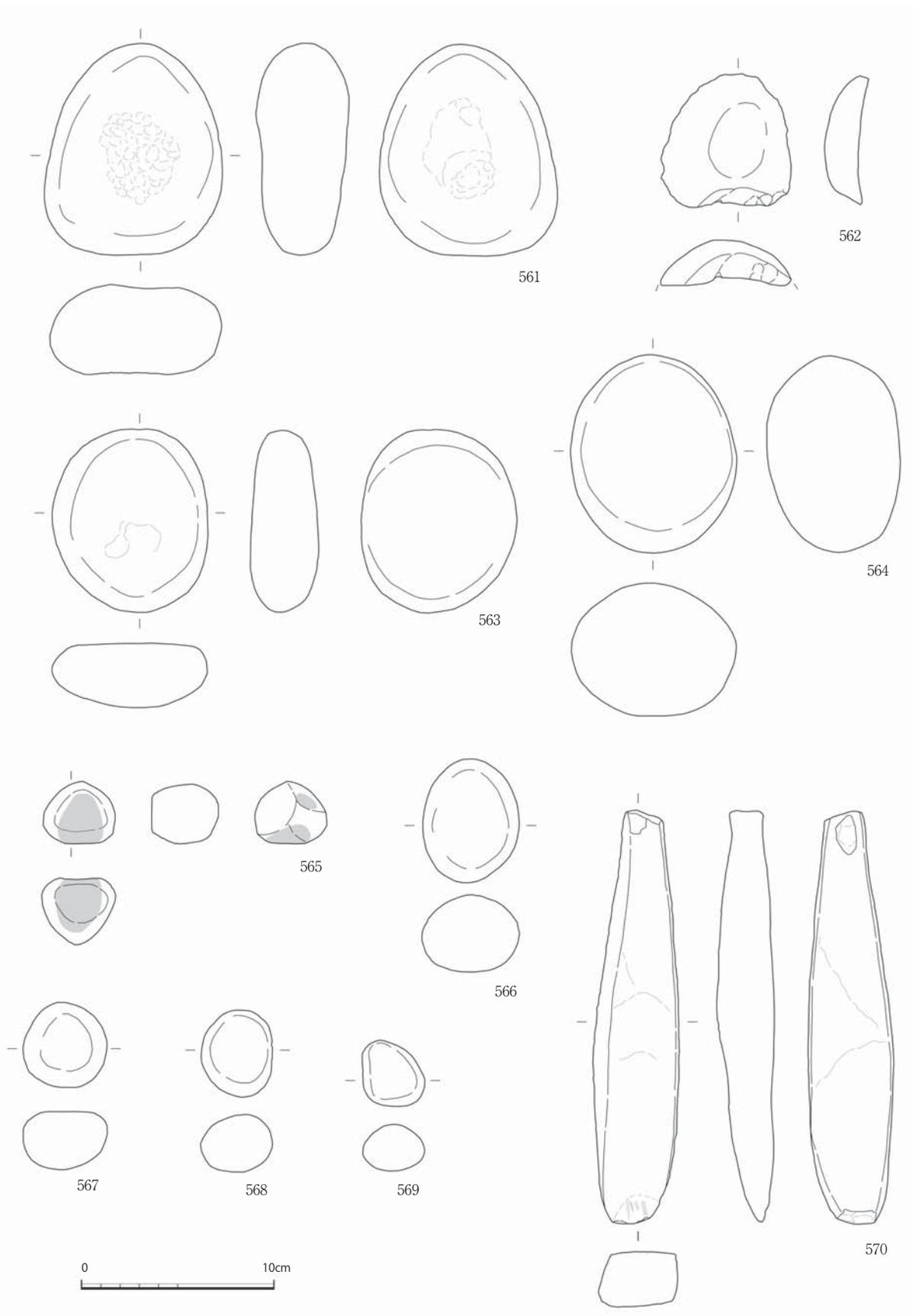


图96 第2次調査（1953年）出土石器（6）



图97 第2次調査（1953年）出土石器（7）



图98 第2次調査 (1953年) 出土石器 (8)

る。533は未成品であり、一部に自然面が残存していることから剥離による整形段階の資料と見られる。534は柱状片刃石斧である。基部側が残存しており、後主面に抉りは確認されない。535は小型の鑿状片刃石斧で、前主面と後主面が丁寧に研磨されている。536は扁平片刃石斧で、全体が丁寧に研磨されている。基部側を欠損している。537は頁岩製の扁平片刃石斧である。表面は風化しているが石材の葉理を確認できる。538は層灰岩製の扁平片刃石斧の未成品である。剥離によって整形されているが研磨には至っていない。539は層灰岩製の鑿状片刃石斧の未成品である。前主面・後主面の判別が可能な程度には整形が進んでいるが一部に自然面を残しており、研磨も確認されない。これらの片刃石斧は、537は葉理が刃部に平行する横目取りであるが、層灰岩製の533～536、538・539はいずれも縦目取りである。

540～545は堇青石ホルンフェルス製の石鎌である。540は小破片だが片面に刃部を確認できる。541は小破片であることに加え、表面が著しく風化しており全形を知り得ないが、かろうじて刃部を確認できることから石鎌とした。542は基部側の破片で、刃部が作り出されているが丸みを帯びており鋭さはない。543は小破片だが形状から刃先部分の破片と見られる。544は白い斑点が形成される段階まで風化が進んでいるが研磨の痕跡を確認することができる。基部から背部にかけて鈍角に屈曲する平面形態が特徴的で、「原の辻型石鎌」と呼称される一群（能登原2012）に該当する。ただし、基部側面の研磨は一部のみである。545は比較的小型で、刃先部分を欠損する。546は頁岩製で、平面形態から石鎌未成品としたが、整形途中であることや他の石鎌に比べるとやや厚手であることから他器種の未成品の可能性もある。

547は堇青石ホルンフェルス製の磨製石鎌である。完形品であるが非常に薄く、表面の風化が激しい。548・549は磨製石剣である。548はホルンフェルス製の有茎式で、関はなだらかである。表面は風化しているが石材の葉理を確認することができる。549は泥岩を素材とした無茎式の基部側破片と見られる。両側縁と体部が丁寧に研磨されているが、研磨痕は全体に及んでいない。

550・551は器種不明石製品である。550は砂岩製で一部が研磨されている。何らかの刃器の未成品と見られるが、詳細は不明である。551は砂岩製で、表面の一部に赤色の付着物が見られる。

552～561は敲石で、561は凝灰岩、それ以外は玄武岩を素材とする。552は主面・裏面に敲打痕が確認される。553は主面・裏面に敲打痕が確認されるほか、主面の一部が磨れている。554は扁平な円礫を素材とし、主面・裏面・上面・下面・両側面に敲打痕が認められる。555は主面・裏面に敲打痕が認められる。556は主面・裏面・側面に敲打痕が認められる。557は他の敲石に比べて小型だが、主面と側面に敲打痕が認められる。558は敲打痕がさほど明瞭でないが、主面・裏面ともに中央部にくぼみが形成されており、両面ともに使用されたと考えられる。559は主面・裏面に敲打痕が認められる。560は扁平な礫を素材としており、主面・裏面に敲打痕が確認されるもののくぼみは形成されていない。561は主面・裏面に敲打痕が認められる。

562～565は磨石である。562は砂岩製で、小破片であり詳細は知り得ないが、磨滅している箇所が見られることから磨石とした。563～565は玄武岩を素材とする。563は主面が平坦であり、この面を使用したと考えられる。564は使用の痕跡が明確でないことから、ほとんど未使用の円礫の可能性もある。565は平坦な面が2面形成されており、いずれの面にも赤色の付着物が確認される。

566～569は玄武岩製で、いずれも敲打や磨耗といった使用痕が明確でないことから、投弾とした。

570は砂岩製の不明石製品である。大型の棒状で、下端部分が磨滅しているが、こういった用途で使用されたかは不明である。

571～588は砥石である。571は砂岩製で、2面利用されており、両面に線状痕が認められる。572

は砂岩製で、主面と側面の2面が利用されている。573は砂岩製で、主面・側面の2面は確実に利用されており、主面にはわずかに溝状痕が形成されている。裏面にかすかに線状痕のような痕跡が確認されるものの、主面・側面に比べて目が粗く、砥面は発達していない。574は砂岩製で1面利用されており、線状痕が認められる。575は砂岩製の定形砥石破損品で、主面・裏面・両側面の4面が利用されている。576は砂岩製の定形砥石破損品で、主面・裏面・左側面の3面の利用が利用されている。また、左側面は凸字型の断面を呈しており、両面からの擦切溝を施した後折り取られた可能性がある。577は砂岩製の定形砥石破損品で、主面・裏面・両側面に加えて上面の一部も利用される5面利用である。いずれの面も使い込まれており砥面が発達している。578は砂岩製で、1面利用されている。579は砂岩製で1面利用されており、利用面が曲面状であることが特徴的である。580は砂岩製で、1面利用されているが砥面はさほど発達していない。581は砂岩製で、1面利用されており、砥面の発達により使用部がややくぼんでいる。582は砂岩製で、主面・両側面と裏面の一部が利用される4面利用である。主面が特に使い込まれており、面の中央部に長軸方向のくぼみが形成されている。583～585は黒色を呈するきめ細かく緻密な泥岩を素材とするもので、同一石材である。583は1面利用されており、研磨痕が明瞭である。584は小破片であるが主面に明瞭な使用痕が認められる。585は比較的大型の砥石の破損品であり、発達した砥面が6面確認される。主面・裏面と右側面の間にそれぞれ形成されている2つの面に、長軸方向に削られたような幅1～3ミリ程度の痕跡が多数認められる点が特筆される。586は砂岩製で、主面・側面の2面が利用されている。石材本来の微妙な起伏が残っており、砥面の利用が進行している途中段階であると見られる。587は粘板岩製で、主面・右側面および左側面の一部の3面が利用されている。588は砂岩製で、主面・右側面の2面が利用されている。

589は石斧の破損品であるが、右側面が平滑に研磨されており、何らかの転用がされたものと考えられる。

590は層灰岩である。主面は自然面で、裏面は葉理に沿って割れている。石斧等の石材として持ち込まれた可能性がある。

3. 1954年調査出土石器

591～618は1954年の調査で出土した石器である。

591・592は黒曜石製の打製石鏃である。591は剥離調整が粗く、一部に自然面の残存が観察される。592は小型の完形品で、基部に両側から剥離が施されており凹基に近い形態となっている。593は安山岩製の剥片である。側縁に剥離が施されているが製品か素材かは不明である。

594～596は石錘である。594は砂岩製で、長軸方向の溝と端部に穿孔が施されている。595は泥岩製で、短軸方向の溝を持つ。596は砂岩製で、長軸方向の溝を持つが、穿孔は見られない。594は下條分類の小型A型、595は小型B型にあたる。

597は玄武岩製の太型蛤刃石斧で、今山系石斧であると考えられる。両側縁が尖る凸レンズ状の横断面を呈し、重厚な作りである。598は蛇紋岩製の両刃石斧である。刃部が研磨されているが、両側縁に敲打痕が確認される。蛇紋岩製で基部が狭い両刃石斧は佐賀県吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区に類例がある（細川編2008）。599は砂岩製の両刃石斧である。表面が研磨されており、完成品の刃部の破片と見られる。600は玄武岩製の石斧未成品である。表面に敲打痕が見られ、研磨には至っていない。601は石斧未成品としたが、自然面が残存し整形があまり進んでおらず、敲石などの可能性もあ

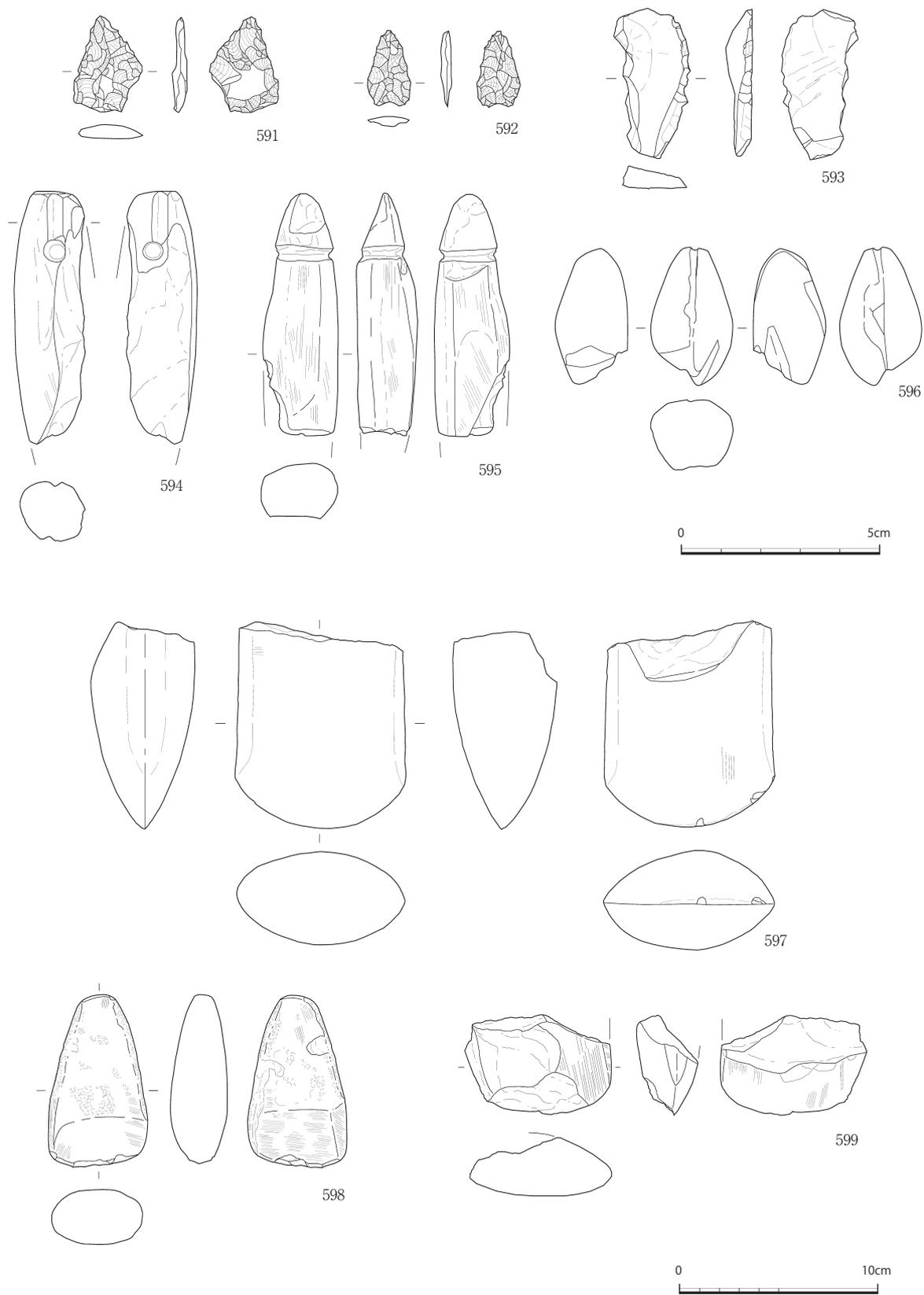


图99 第4次調査（1954年）出土石器（1）

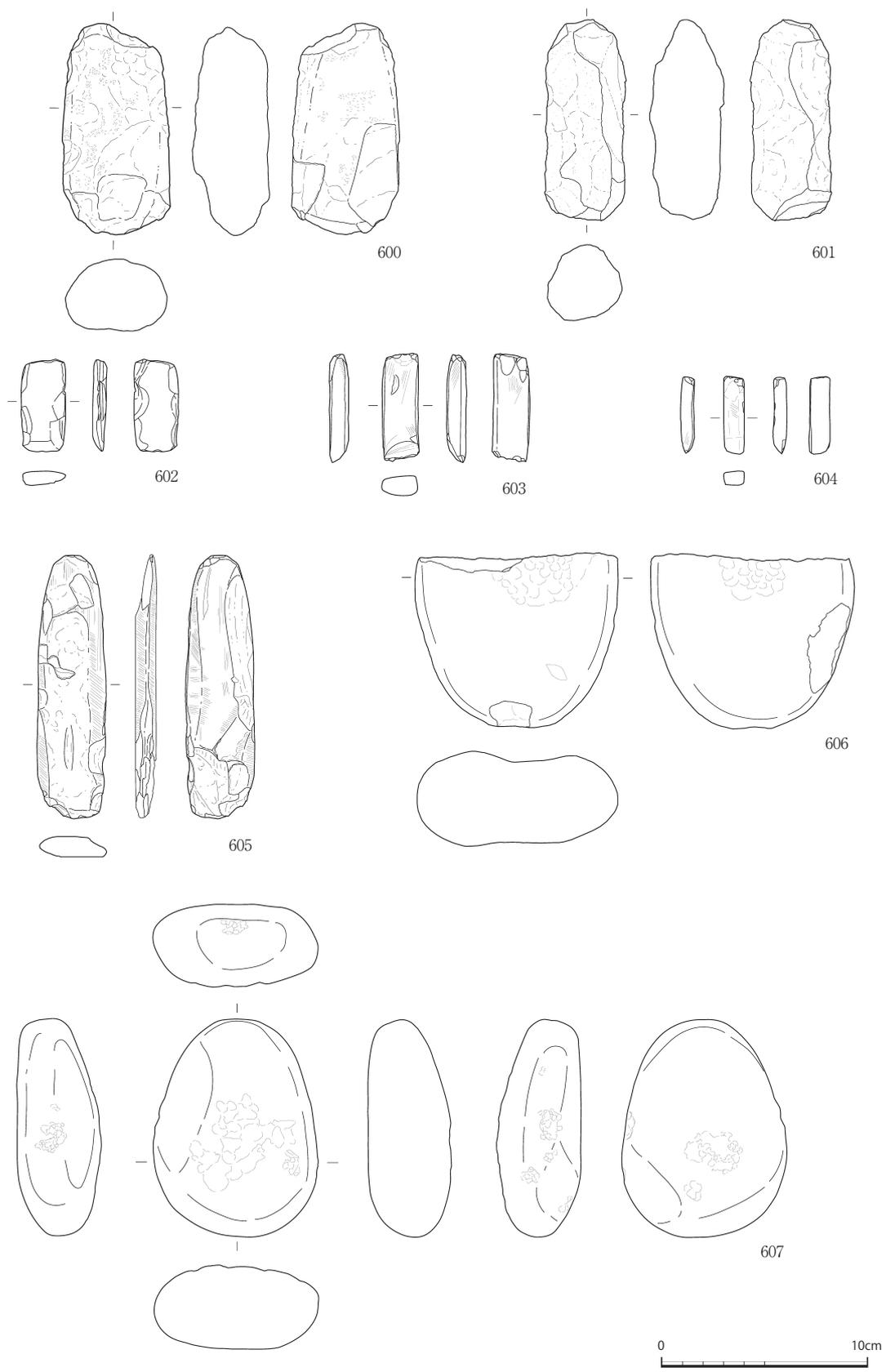


图100 第4次調査（1954年）出土石器（2）

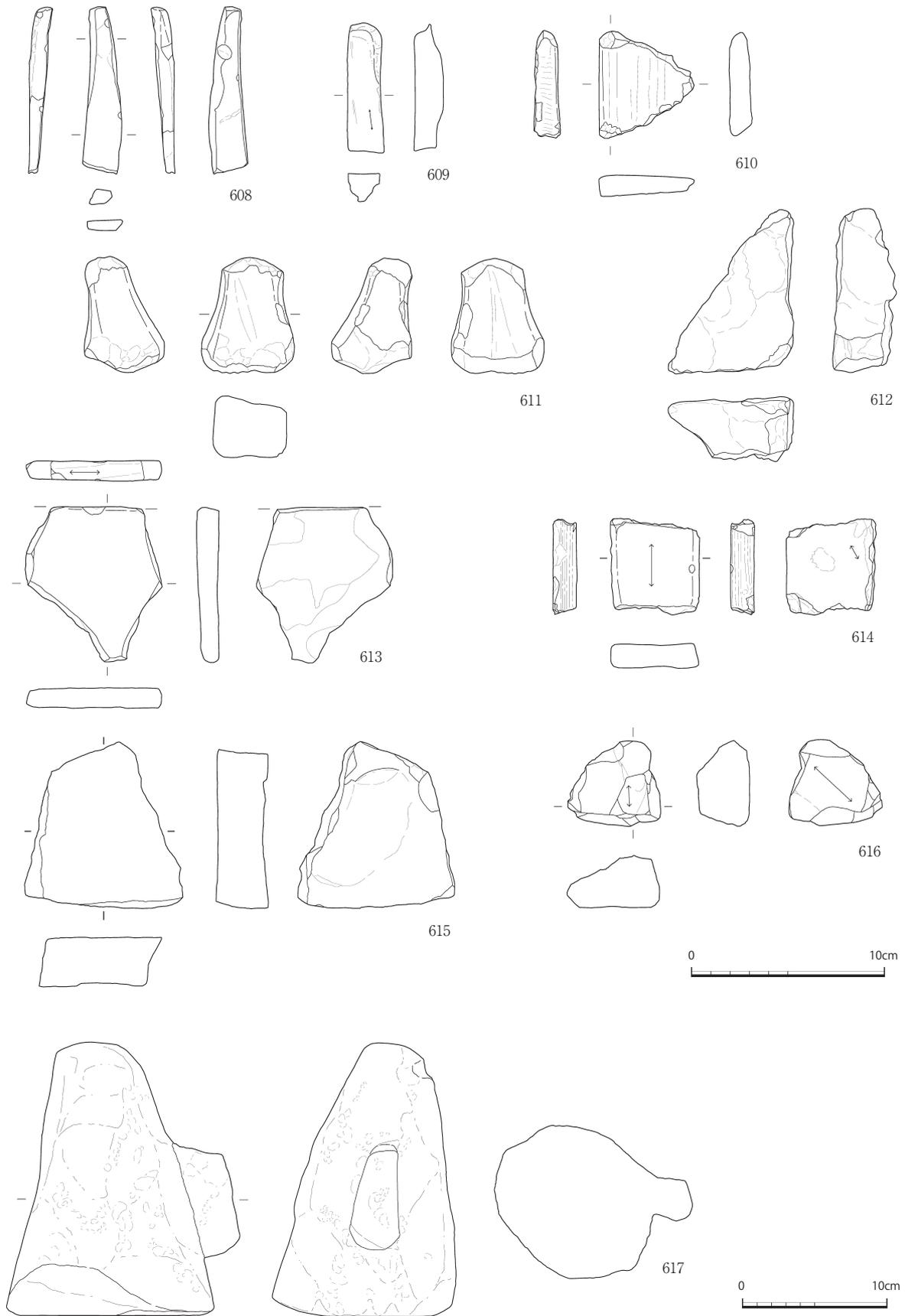


图101 第4次調査（1954年）出土石器（3）

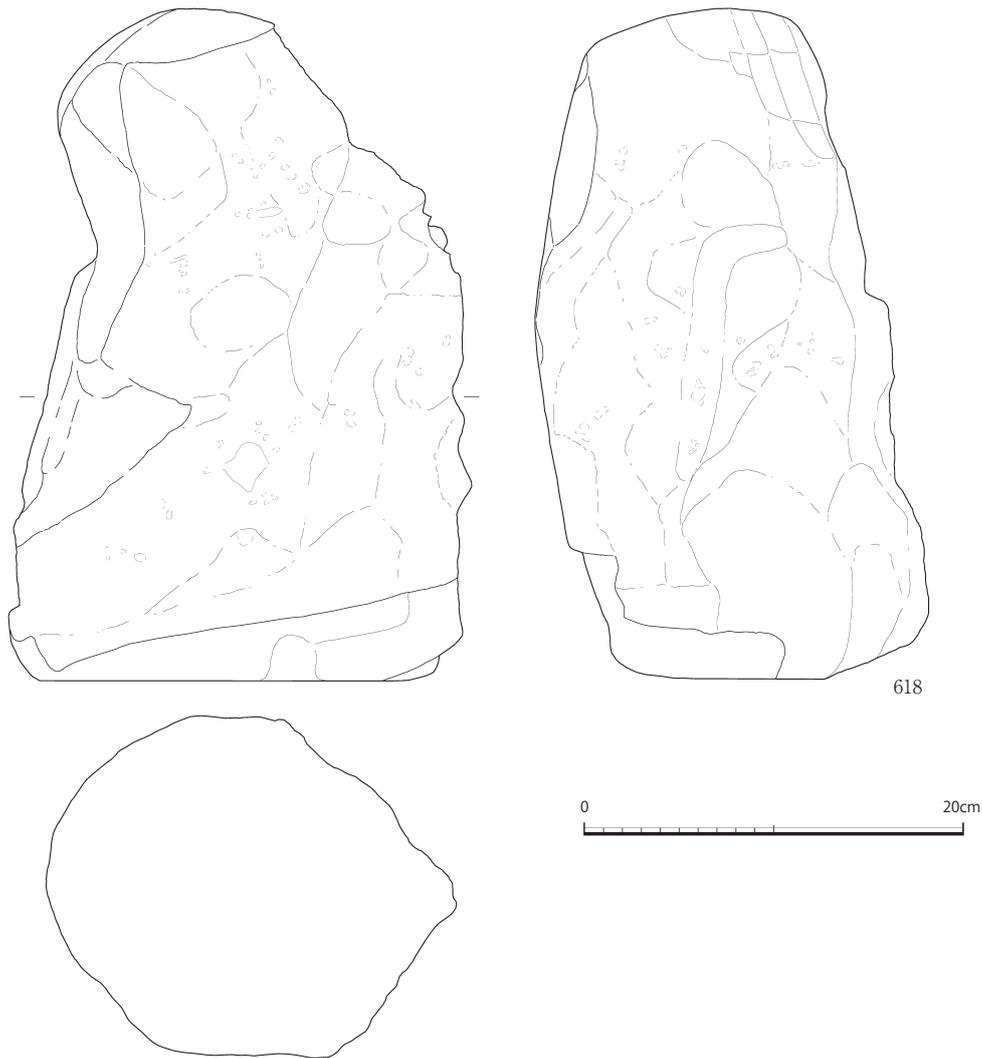


図102 第4次調査（1954年）出土石器（4）（縮尺1/4）

る。602は砂岩製の小型の扁平片刃石斧である。表面が風化しており、調整について詳細は不明である。603、604は小型の鑿状片刃石斧である。603は頁岩製で刃部に微細な剥離が見られる。604は層灰岩を用いた縦目取りによって製作されている。また刃部に偏りがあることから使用と刃部の再研磨を経ていると考えられる。

605は粘板岩製の磨製石剣である。無茎式で、刃部が研磨されているが、体部の研磨は一部に留まっている。

606は凝灰岩製の敲石で、半分ほど欠損しているが両面に敲打痕が確認できる。607は凝灰岩製の敲石・磨石である。敲打の痕跡が確認される一方、一部が磨り減っていることから、磨石としても使用された可能性がある。

608～616は砥石である。608は泥岩製で、4面利用されている。いずれの利用面も下半部が主に利用されている。609は砂岩製で、1面利用されている。610は砂岩製で2面利用されており、定形砥石の破損品と考えられる。611は石英斑岩製で、利用面は4面でいずれの面も砥面が発達している。表と裏面に筋状の使用痕が確認される。612は砂岩製で、3面利用されている。613は砂岩製で、2面利用されている。614は砂岩製の定形砥石の破損品と見られ、4面を砥面とする。615は砂岩製の砥石と

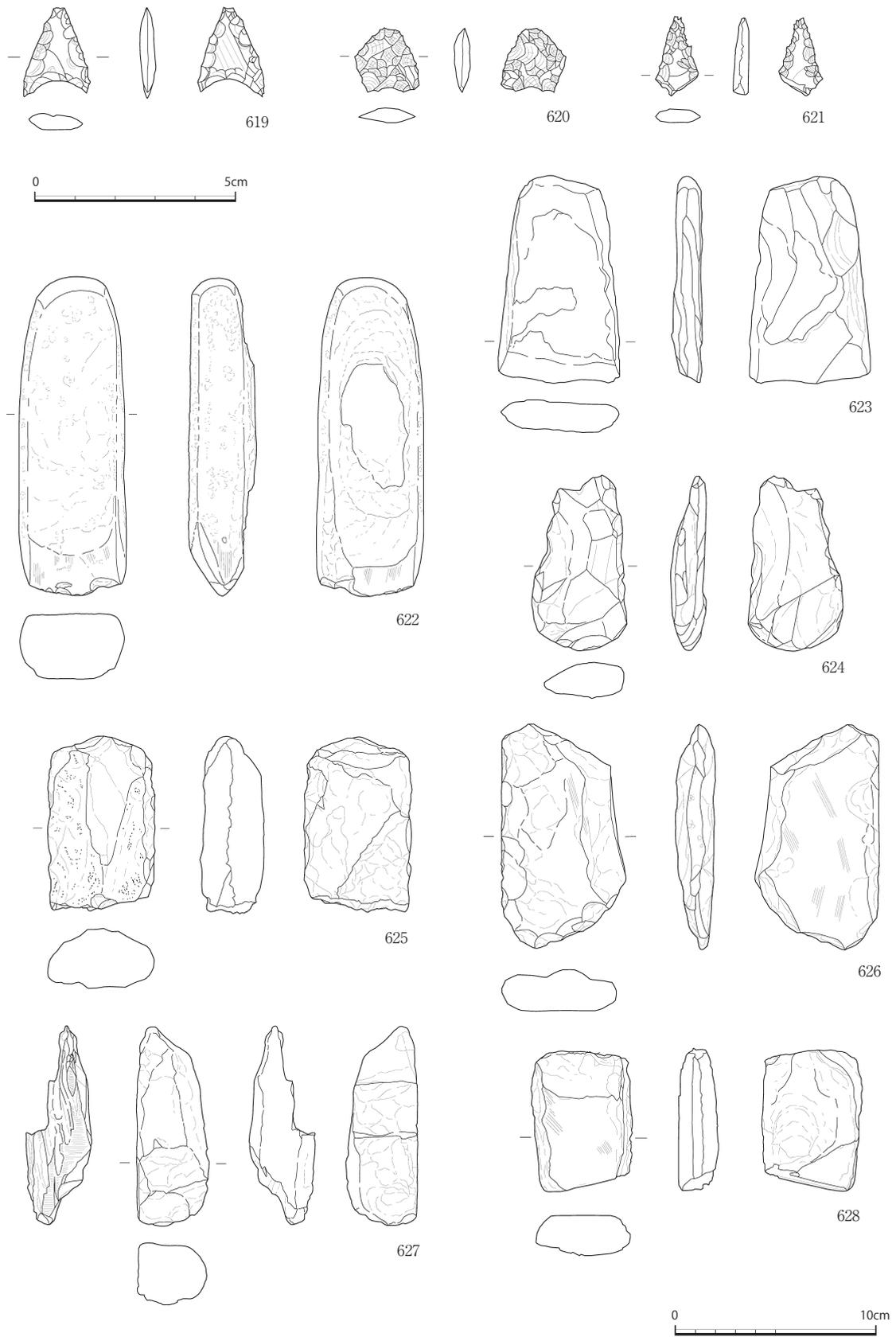


图103 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(1)

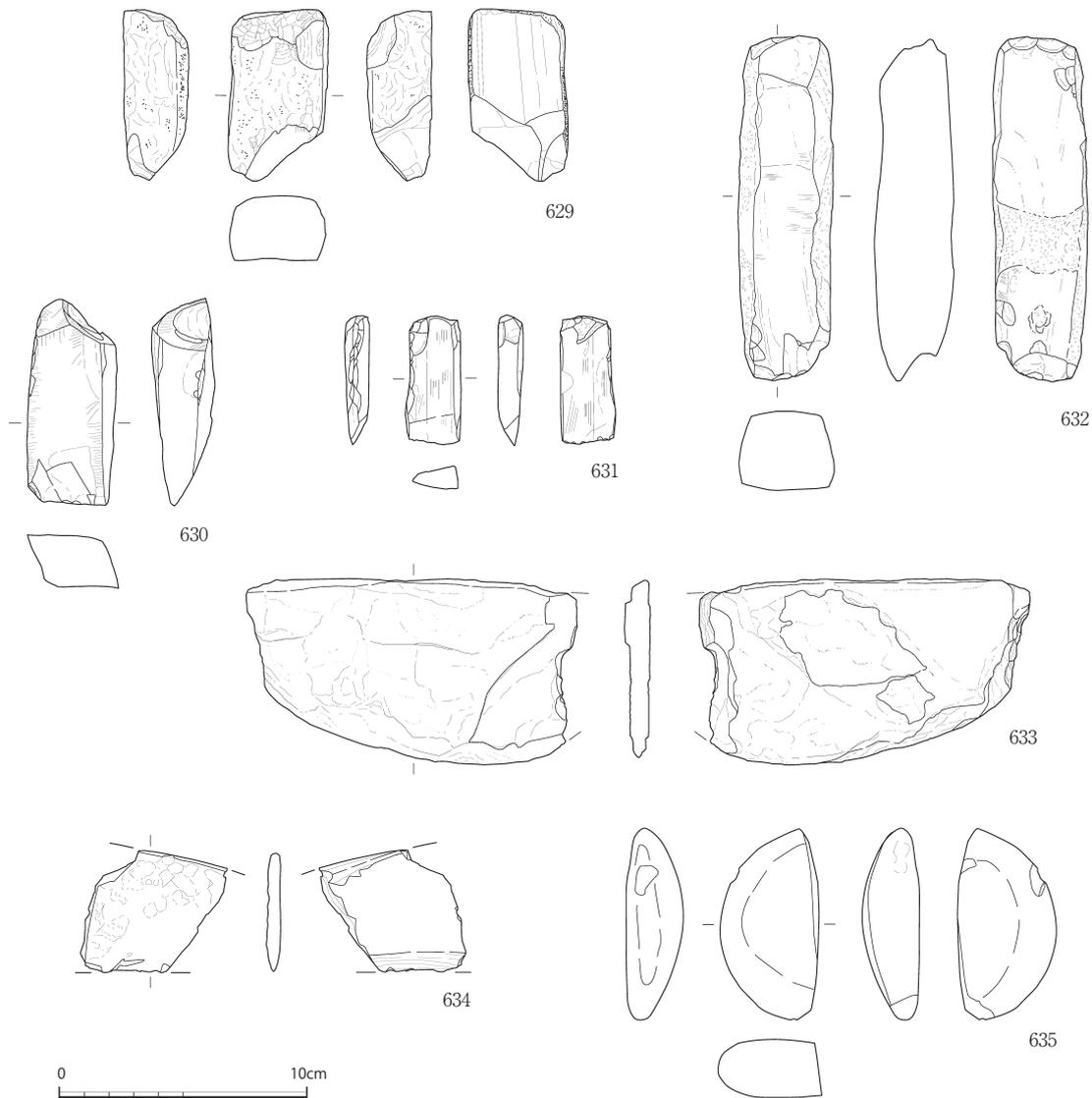


図104 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（2）

したが、砥面が発達しておらず使用痕も不明瞭である。616は砂岩製で、2面利用されている。

617・618は多孔質の玄武岩を素材とする石製支脚である。617は完形品で、凸状の突起を作り出しているが、加工痕は不明瞭である。618は高さ35.4cmの大型品で、突起の作り出しは弱い。上部に削りの痕跡が見られる。

4. 1951・1961年調査出土石器

619～696は1951年および1961年の調査で出土した石器である。両年の調査範囲が同じであり、1951年調査での出土石器が少数であることから、ここでまとめて記載する。

619～621は黒曜石製の打製石鏃である。619は基部を両側から剥離した凹基式である。620は片側の脚部を欠損する凹基式である。621は側縁に剥離調整が施され刃部が形成されているが体部に未加工の部分が残っている。

622～632は石斧である。622は玄武岩製の両刃石斧である。刃部は丁寧に研磨されているが、微細

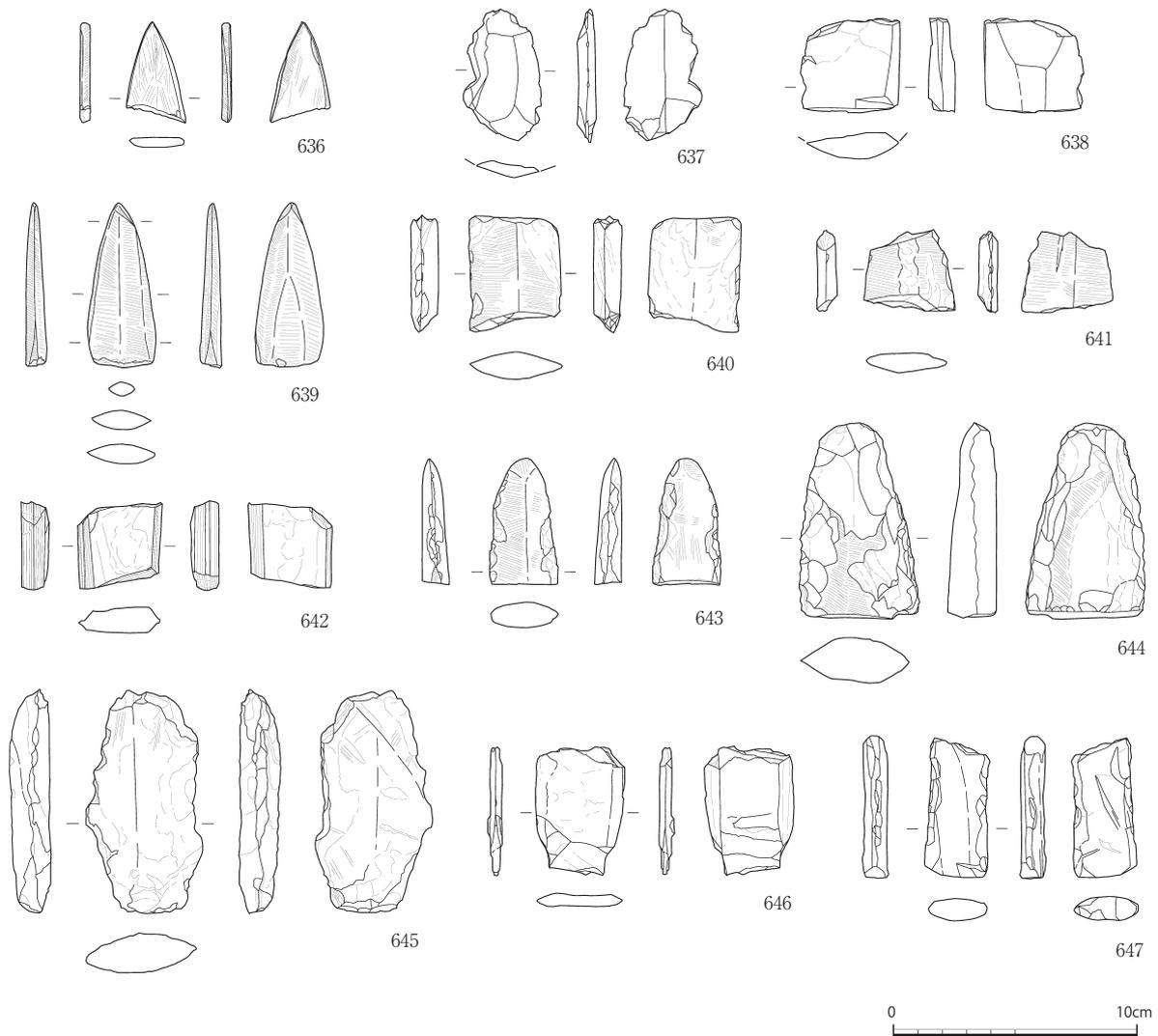


図105 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（3）

な剥離痕があり、刃は丸みを帯びている。体部には側面を中心に敲打痕が見られる。623は砂岩製の片刃石斧である。表面が著しく風化しており研磨の痕跡を確認することはできないが、刃部を研磨によって作り出したものと考えられる。624は砂岩製の両刃石斧である。刃部の形成や体部の整形の途中段階であり、未成品と見られる。625は玄武岩製の石斧未成品である。一部に自然面が残存しており整形があまり進んでいないが、平面や断面形態から見て伐採斧の未成品であると考えられる。626は砂岩製で、加工がほとんどされていないため詳細は不明であるが、石斧の未成品とした。627は頁岩製の石斧である。破損品で全形を知り得ないが、平滑に研磨された面を持ち、横断面が隅丸台形に近いことから柱状片刃石斧未成品の可能性が高い。628はホルンフェルス製で、剥離調整はあまり施されていないものの一部に研磨痕が認められる。横断面形から扁平片刃石斧の未成品と考えたが、縞状の葉理が刃部に平行して見られることから、磨製石剣など他器種の未成品の可能性もある。629は層灰岩製の片刃石斧未成品である。整形があまり進んでおらず、自然面の残存箇所が多く認められる。縦目取りであり、平面形態や横断面形から見て扁平片刃石斧の未成品と考えられる。630は泥岩製の石斧としたが、破片資料であり全形を知り得ない。631は層灰岩製の小型の扁平片刃石斧である。縦目取りで、刃部に偏りが見られることから使用・再研磨を経ていると考えられる。632は層灰岩製の

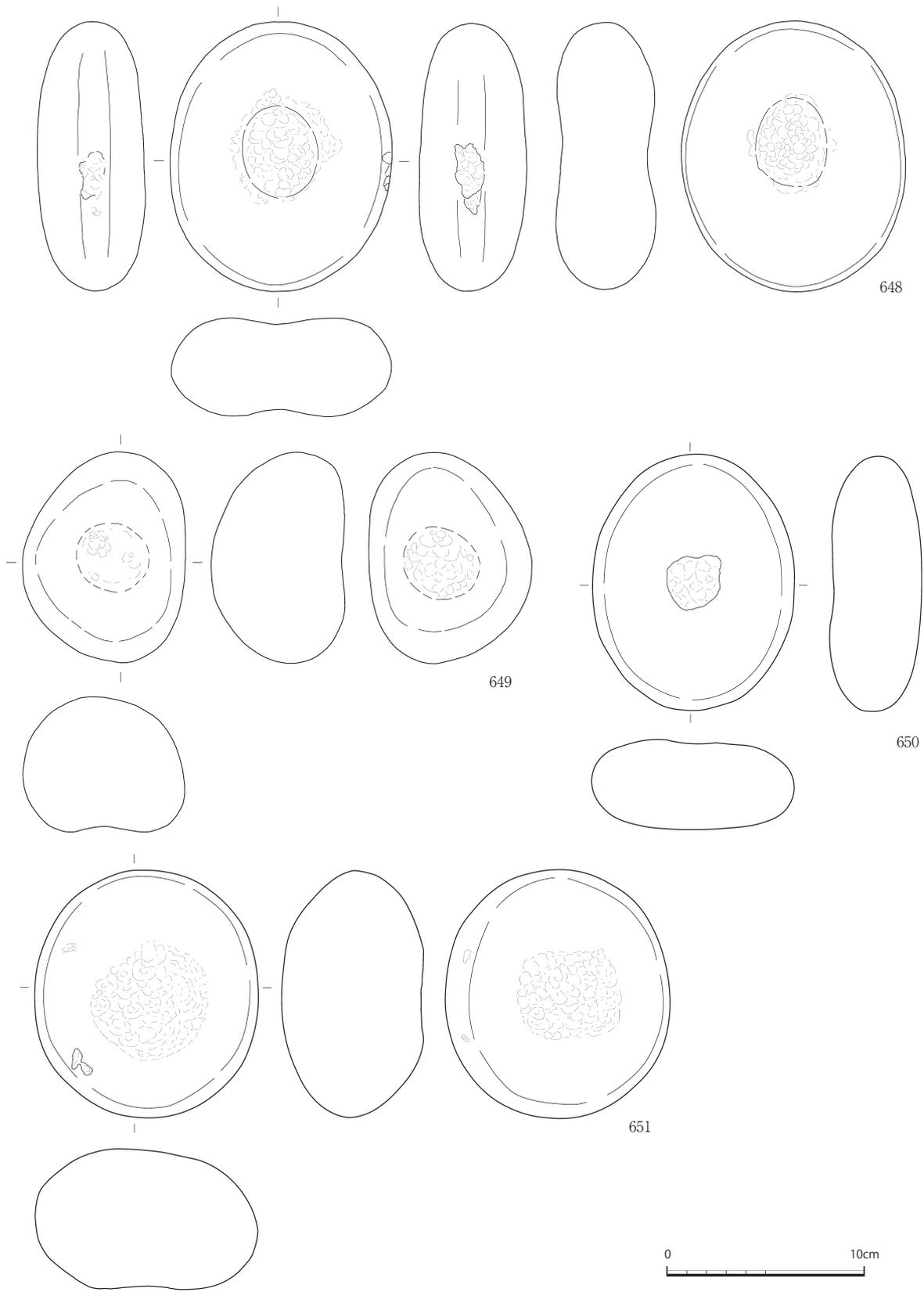


图106 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(4)



図107 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（5）

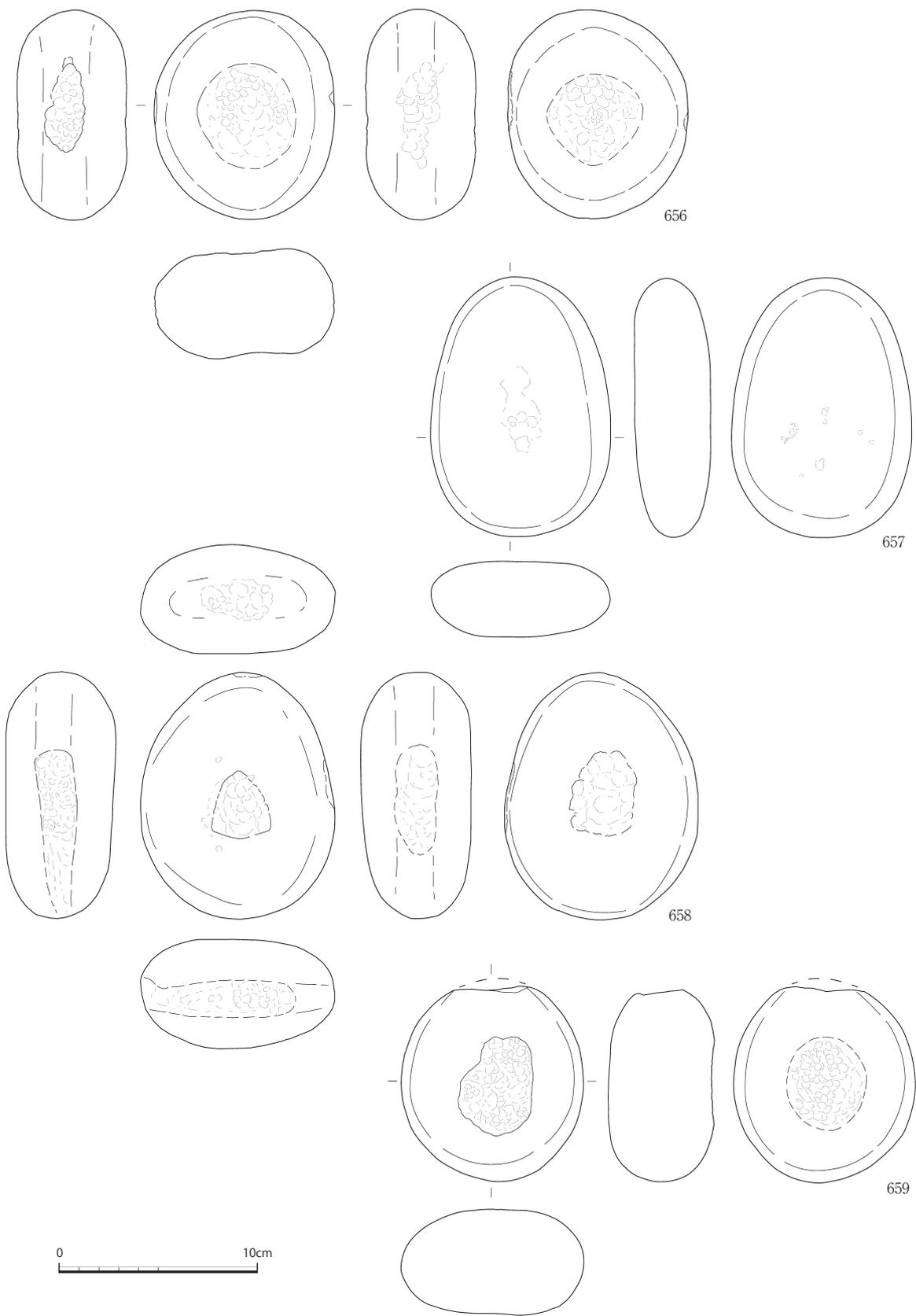


図108 第1次(1951年)・第5次(1961年)調査出土石器(6)



图109 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(7)



图110 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(8)

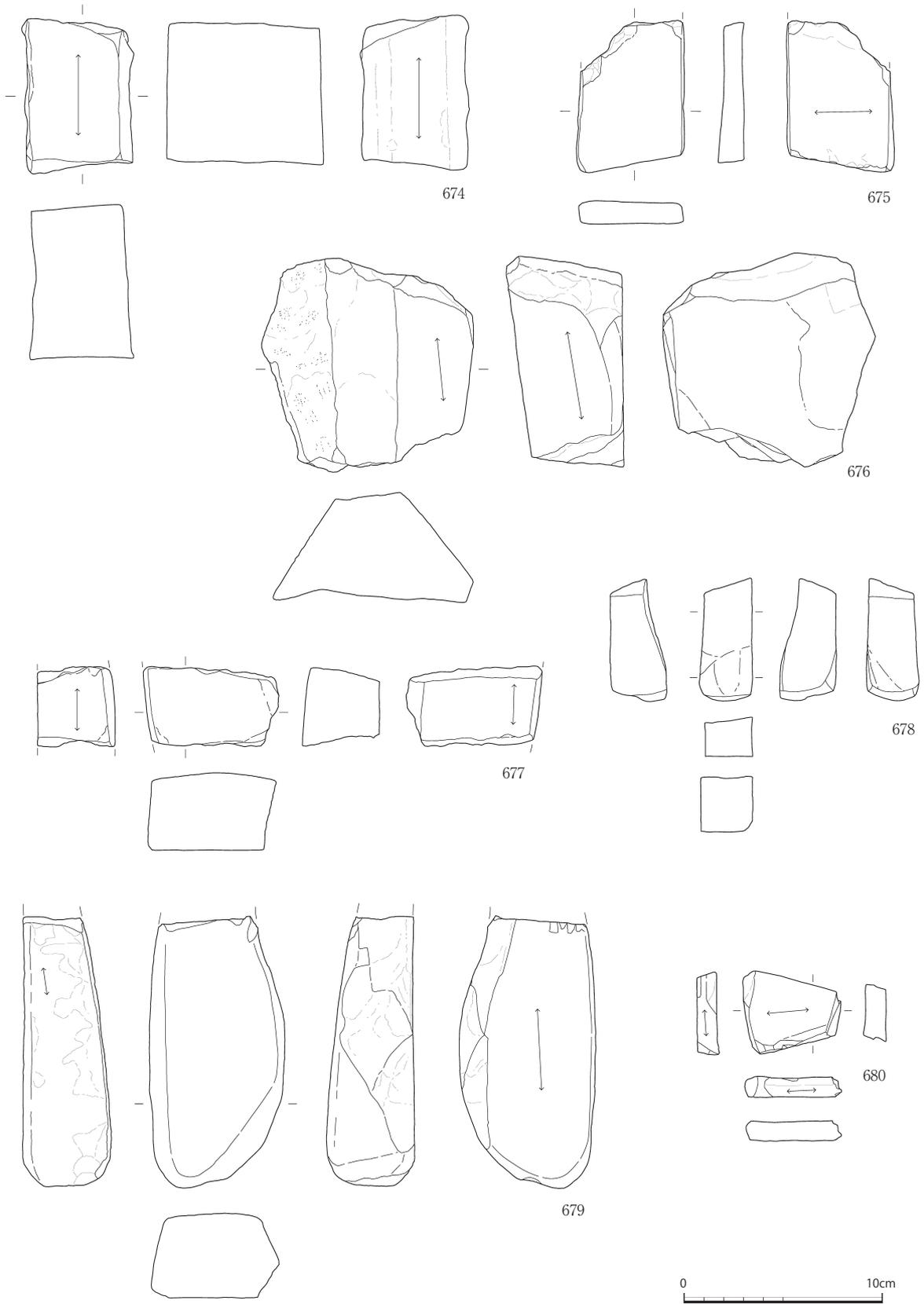


图111 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(9)

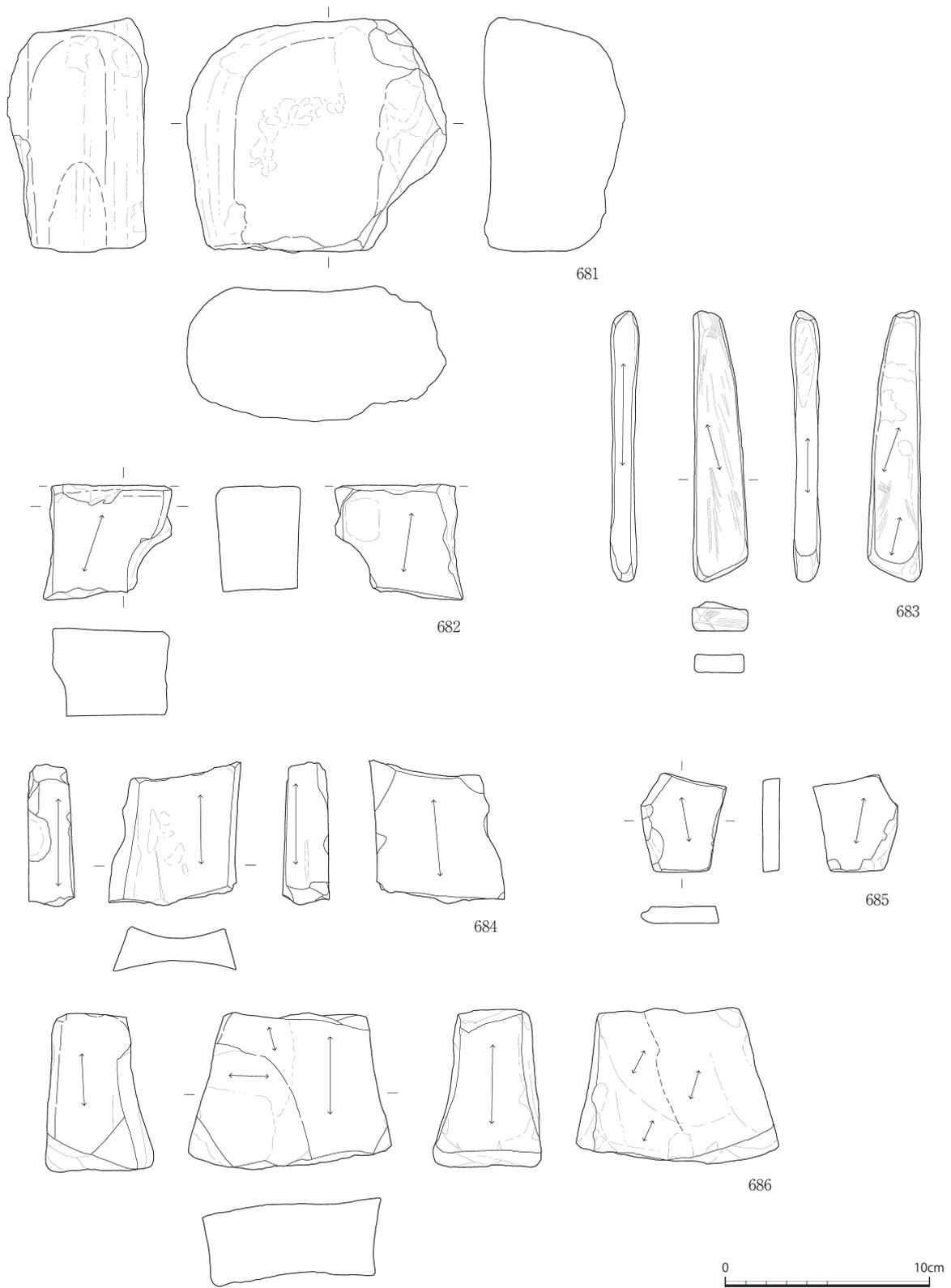


図112 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（10）

柱状片刃石斧である。刃部・基部の整形が完了しておらず、未成品と見られる。抉りに関して、主面に緩やかにほみが形成されているが、裏面にも敲打によって緩やかにほみが形成されている部分

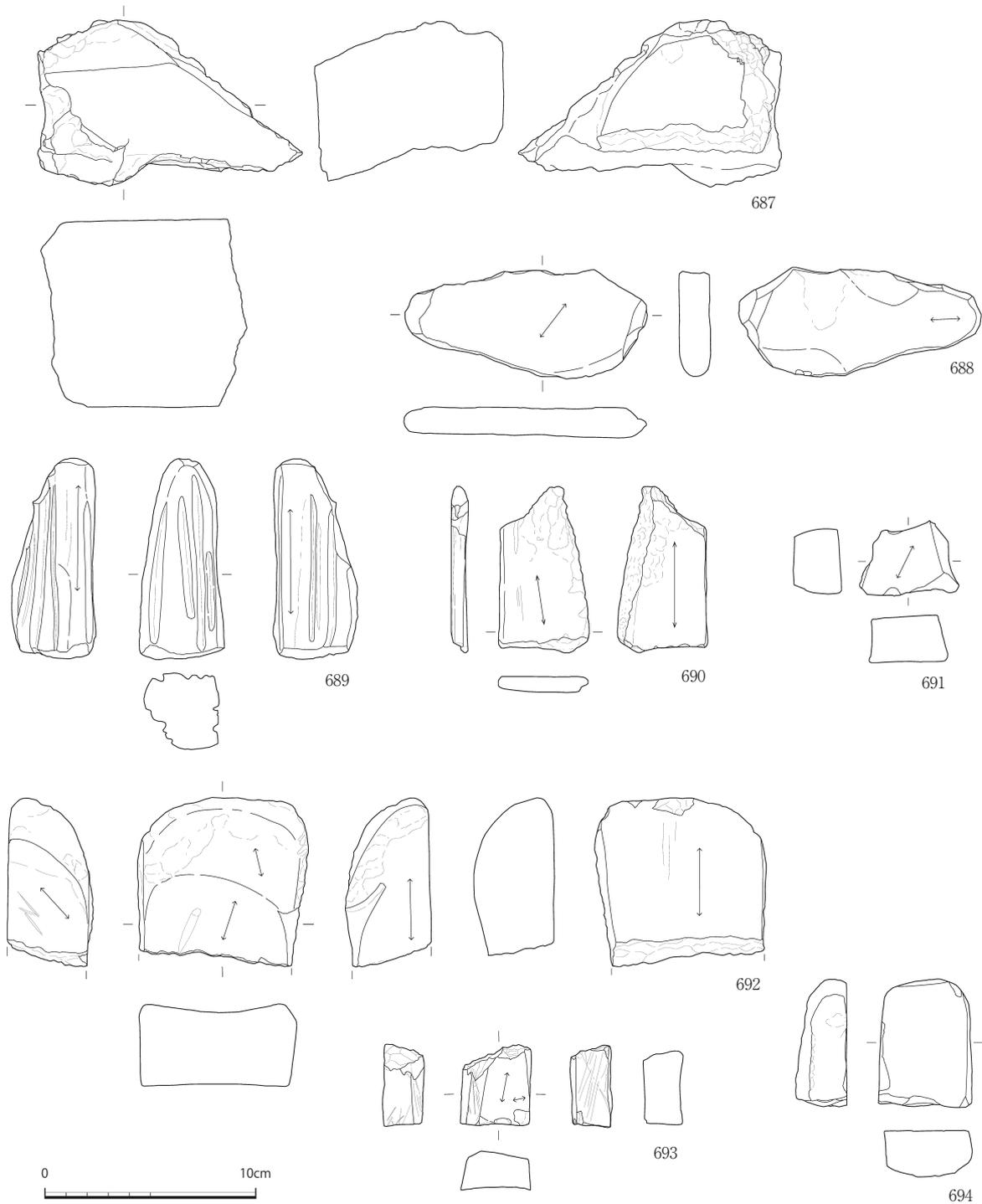


図113 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（11）

があり、前主面と後主面の判別が難しい。横断面形が台形状を呈する場合、挟りがある面（後主面）の幅が広いのが一般的だが、本資料の場合、幅が広いのは裏面側であるものの、縦断面形から判断すれば主面上部に基部としての加工がなされ、裏面に刃部があるものと考えられる。したがって、ここでは主面側を後主面、裏面側を前主面としておきたい。

633は堇青石ホルンフェルス製の石庖丁未成品で、背部・刃部が作り出されていることから研磨の直前段階と考えられる。縁辺部に剥離調整が認められる一方で、縁辺から体部中央まで届くような大

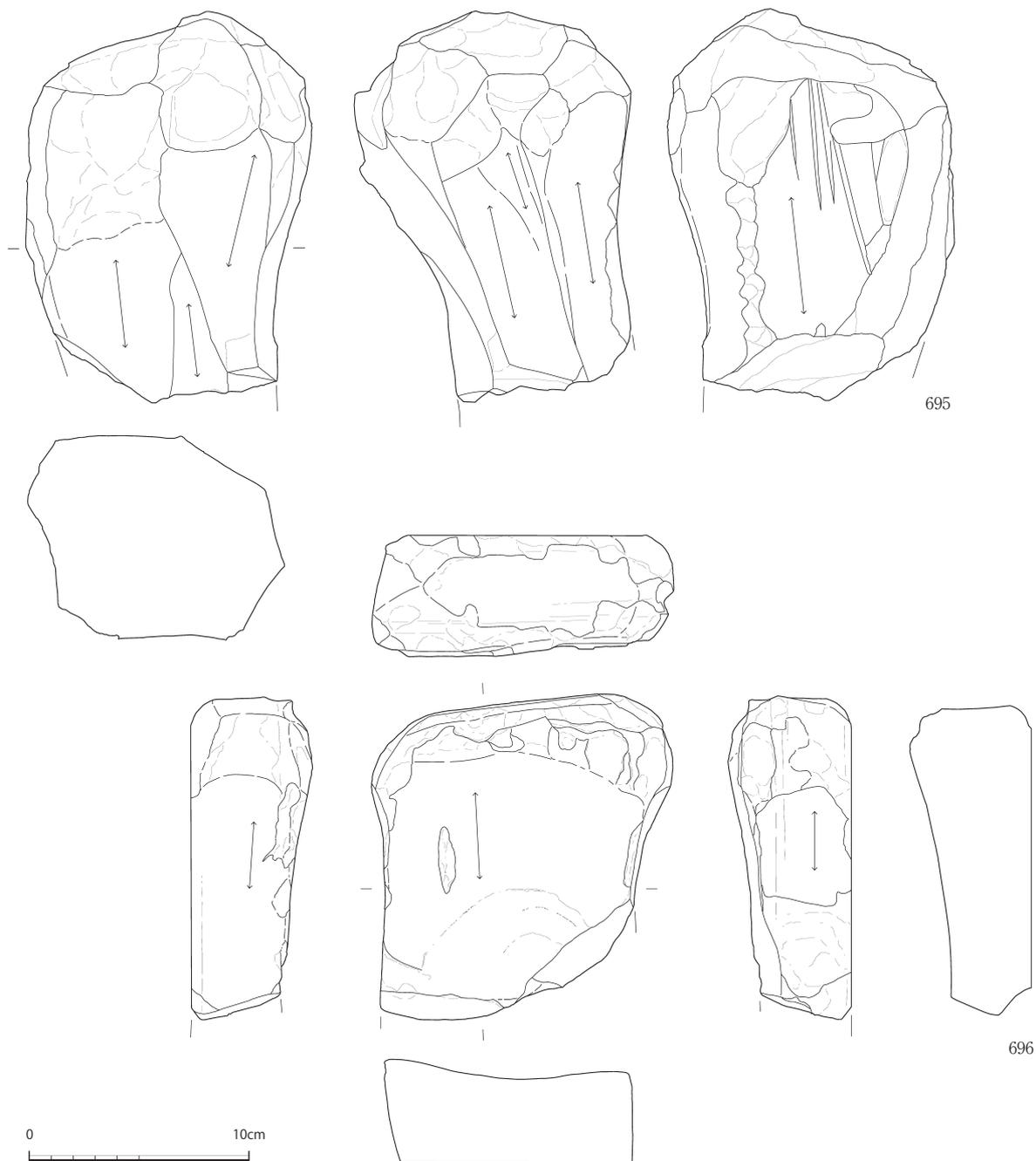


図114 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（12）

きな剥離は明瞭でないことから、薄く扁平な素材剥片が用いられていると見られる。裏面が平坦であることから、裏面が剥離面側で主面が自然面側と推測される。

634は堇青石ホルンフェルス製の石鎌の小破片である。表面は風化しているが、研磨によって刃部が作り出されていることが確認できる。

635は緑色岩製の不明石製品である。濃緑色の石材で、表面全体が磨かれているが、用途は不明である。

636は頁岩製の磨製石鎌で、基部を欠損している。全面が丁寧に研磨されている。637～647は磨製石剣である。637は泥岩製の破片である。剣身部中央に鑄を確認できる。638は泥岩製の破片であ

る。639は粘板岩製で、体部の左右で研ぎ分けることで中央に鑄が通り、横断面は丸みを帯びた菱形を呈する。ただし表裏で鑄の入り方は異なっており、主面は下部まで鑄が通るのに対して裏面では上半部にのみ鑄が通っている。640は頁岩製で、主面は研ぎ分けによって中央に鑄が通る。裏面にも鑄が通るが、研磨は一部にしか施されていない。641は頁岩製で、全体的に丁寧な研磨されているが、一部研磨が及んでいない部分が残っている。642は層灰岩製で、互層状の葉理が明瞭である。表面に研磨は施されていない。643は頁岩製で、体部は全体的に研磨されているが明瞭な鑄が形成されるには至っておらず、刃部も作り出されていない。644は安山岩製で、形態的には石剣の可能性はあるが、使用石材から見て他器種の可能性もある。645は頁岩製で、基部付近で破損した未成品と見られる。剥離調整による整形で横断面が菱形に近くなっているが体部の研磨はほとんどされていない。646は堇青石ホルンフェルス製で、関付近の破片である。表面が風化しているため研磨痕は直接確認できないが、研磨によって刃部となだらかな関が作り出されていると考えられる。647は砂岩製で、柄の一部分と見られる。

648～661は玄武岩製の敲石である。648は扁平な円礫を素材とし、主面・裏面に加えて、側面にも敲打痕が認められる。649は断面が半円形状の円礫を素材とし、平坦な面には敲打によってくぼみが形成されている。また、曲面側にも若干の敲打痕が確認される。650は扁平な円礫を素材とし、主面に使用痕が認められる。651は主面・裏面に敲打痕が認められ、裏面にはややくぼみが形成されているが、主面には形成されていない。652は主面・裏面・側面に敲打痕が認められ、主面と裏面にくぼみが形成されている。表面に若干擦痕が見られる。653は主面・裏面にはほとんど使用の痕跡がないが、側面に使用痕が認められる。654は主面・裏面・上面に明瞭な敲打痕が認められるほか、側面にも若干の敲打痕が見られる。655は主面・裏面に敲打痕が認められる。裏面はくぼみの形成に至っていない一方で主面は敲打の集中で深くくぼみが形成されている。656は主面・裏面に加え両側面にも明瞭な敲打痕が認められる。657は扁平な円礫を素材とし、若干の敲打痕が見られるが明瞭ではなく、あまり使用されなかったものと考えられる。658は扁平な円礫を素材とし、主面・裏面の敲打によるくぼみの形成に加え、両側面と上面・下面にも使用痕が認められる。他資料に比べて使用範囲が明瞭である。659は主面・裏面に敲打痕が認められる。660は主面および側面に敲打痕が認められる。また裏面が磨滅しており、磨石として使用された可能性もある。661は主面に敲打痕が認められるがくぼみが形成されるには至っていない。

662は玄武岩製台石の破損品である。断面半楕円状の大型の円礫を素材とし、平坦な方の面に敲打痕が認められる。

663～667は玄武岩製の磨石である。663は表面の風化により使用痕は明瞭でないが、平坦になっている主面・裏面を使用したものと考えられる。664は棒状の礫を素材とし、主面が磨耗し縦断面が緩やかな凹面状を呈することから、この面が主に利用されたと見られる。665は主面・裏面が磨滅しており、この2面が利用されたと考えられる。666は主面・裏面の一部が磨滅しており、この2面が利用されたと考えられる。667は主面が磨滅し平坦になっている。

668～696は砥石である。668は砂岩製で、2面利用されている。わずかに線状痕が認められる。669は砂岩製で、主面全体と裏面の一部の2面利用である。両面とも砥面が発達しており、くぼみが形成されている。670は砂岩製で、2面利用されている。671は砂岩製の定形砥石で、4面利用されている。672は砂岩製の定形砥石で、4面利用されている。主面に深さ1mm、最大幅5mm程度の溝状痕が認められる。673は砂岩製で、3面利用されている。674は砂岩製で、2面利用されている。両面とも使い込まれているが、主面よりも裏面の方がやや粗い。675は砂岩製の定形砥石の破損品で、主面と

裏面の2面が利用されている。676は砂岩製で、主面・右側面2面・裏面の計4面が利用されている。677は砂岩製で、主面・裏面・側面の3面利用されている。主面は使い込まれているがやや凸レンズ状の断面形を呈している。678は砂岩製で、主面・両側面・裏面の4面利用で、いずれの面も使い込まれている。679は泥岩製で、主面・両側面・裏面の4面利用されている。裏面には長軸方向の擦痕が明瞭に認められる。680は砂岩製で、主面・側面・下面の3面利用されている。下面の上半部と下半部の間に稜線が入っており、使用頻度に差があった可能性がある。681は砂岩製で、使用の方向は明瞭でないが、主面および左側面の一部の2面利用である。側面には石材の葉理が確認できる。主面は使い込まれてくぼみが形成されているが、一部に本来の微妙な凹凸が残されている。682は砂岩製で、主面・裏面の2面利用である。683は黒色を呈する泥岩製で、1953年調査出土の582～584と同一石材である。定形砥石の完形品で、主面・両側面・裏面に加えて下面も使用されている5面利用である。いずれの面も使い込まれているが、裏面には一部研磨が及んでいない部分が残っている。684は砂岩製で、主面・両側面・裏面の4面利用である。いずれの面も使い込まれており、特に主面・裏面は凹面状になっている。685は砂岩製で、主面・裏面の2面利用である。686は砂岩製で、主面・両側面・裏面の4面が利用された定形砥石である。いずれの面も使い込まれているが、主面と裏面は同一面上でも箇所によってやや粒度が異なり、使用の方向もそれぞれ異なっている。687は花崗岩製で、主面と裏面が砥石として利用された可能性があるが、使用痕は不明瞭である。石英の結晶が発達しているが、粒度自体は細かい。688は砂岩製で、主面・裏面の2面利用である。689は砂岩製で、主面・両側面の3面利用である。粒度は#400相当とやや粗めだが、幅3～4mm、深さ2～4mm程度の太く深い溝状痕が8本と、幅1～2mm、深さ0.5mm程度の細く浅い溝状痕が2本認められ、鉄器との関係が注目される。690は泥岩製で、主面・裏面の2面が利用されていることに加えて、片側の側面が面取りされている。691は砂岩製で、主面のみの1面利用である。692は砂岩製の置き砥の破損品で、主面・両側面・裏面の4面利用である。いずれの面も使い込まれており、特に主面は凹面状になっている。主面の上半部の曲面部分も若干使用されている。693は泥岩製で、主面・両側面と、主面と左側面の間に形成された面の4面利用である。表面には線状痕が認められる。694は砂岩製で、側面が砥石として利用された可能性があるが、使用痕は不明瞭である。695は角柱状の砂岩を素材とする。面によって粗さがやや異なるが、5面が利用され、利用部分以外は自然面である。右側面に幅1～3mm、深さ1.5mm程度の溝状痕が4本認められる。696は砂岩製で、主面・両側面・上面の4面が利用された定形砥石の破損品である。主面と両側面は特に砥面が発達しており、凹面状を呈するが、溝状痕や目立った線状痕は確認されない。側面および上面には石材の葉理が確認できる。

本稿を執筆するにあたり、石斧について新潟大学の森貴教先生にご教示をいただきました。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

引用文献

- 下條信行1984「弥生・古墳時代の九州形石錘について—玄界灘海人の動向—」『九州文化史研究所紀要』29：pp.71-103
福田一志・中尾篤志編2005『原の辻遺跡 総集編1』長崎県教育委員会
能登原孝道2012「堇青石ホルンフェルス製石鎌の生産と流通」『西海考古』8：pp.83-92
平尾和久2008「紡錘車の編年とその画期—北部九州出土資料を中心に—」『伊都国歴史博物館紀要』3：pp.1-12
細川金也編2008『吉野ヶ里遺跡—田手二本黒木地区の弥生時代中期の石器—』佐賀県教育委員会

表3 原の辻遺跡出土石器観察表

No	調査年度	器種	出土地点	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
513	1953	打製石鏃		黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.39	
514	1953	打製石鏃		黒曜石	2.3	1.4	0.3	1.12	
515	1953	打製石鏃	IV C	黒曜石	2.3	1.5	0.25	0.71	
516	1953	打製石鏃		黒曜石	2	1.8	0.4	1.27	
517	1953	打製石鏃		安山岩	2.3	2.2	0.4	1.87	
518	1953	打製石鏃		安山岩	2.6	1.6	0.4	1.66	
519	1953	打製石鏃		安山岩	2.8	2.8	0.7	4.65	
520	1953	石鏃		黒曜石	3	2.2	1	4.46	
521	1953	石鏃		泥岩	3.2	1.2	1.1	5.77	
522	1953	石鏃	第3C 黒色層	泥岩	7.9	1.6	1	21.66	
523	1953	石鏃	III H	砂岩	4.4	2.4	1.7	18.7	
524	1953	水晶原石	III C	水晶	4.4	1.1	1.1	10.3	
525	1953	紡錘車		安山岩	3.3	1.9	0.3	3.12	
526	1953	紡錘車未成品	IV A	砂岩	5.3	5.1	1.2	43.86	
527	1953	剥片	第4	安山岩	7	5.4	1.8	67.28	
528	1953	剥片	山口土雄畑表面	安山岩	5.4	3.6	1.4	36.63	
529	1953	両刃石斧	III G	蛇紋岩	10.4	5.1	2.3	195.5	
530	1953	両刃石斧	山口土雄畑表面	蛇紋岩	9.8	4.6	2.9	191.84	
531	1953	両刃石斧	IV C	蛇紋岩	8.5	4.3	1.6	92.74	
532	1953	磨製石斧	II F	玄武岩	7.4	4.6	2.2	64.5	
533	1953	片刃石斧未成品	山口土雄畑	層灰岩	7.4	4.2	3	140.67	
534	1953	柱状片刃石斧	IV表面	層灰岩	8.3	3.1	3.5	170.69	
535	1953	ノミ状石斧	第II E2	層灰岩	5.2	1.5	1.6	29.9	
536	1953	扁平片刃石斧	II H	層灰岩	3.8	2.9	1.2	24.3	
537	1953	扁平片刃石斧	III D	頁岩	6.2	4.8	0.8	46.6	
538	1953	扁平片刃石斧未製品		層灰岩	6	3.3	1.2	31.98	
539	1953	片刃石斧未成品	第2 T	層灰岩	6.7	2.2	1.9	46.25	
540	1953	石鏃	IV F	董青石ホルンフェルス	6.1	4	0.3	14.34	
541	1953	石鏃	II P	董青石ホルンフェルス	4.9	5.5	0.4	13.02	
542	1953	石鏃	I 貝層	董青石ホルンフェルス	6.9	5.4	0.5	22.2	
543	1953	石鏃	IV E	董青石ホルンフェルス	4.5	3.7	0.35	9.19	
544	1953	石鏃	IV	董青石ホルンフェルス	9.1	4.4	0.5	36.23	
545	1953	石鏃	II - III 間吉富畑	董青石ホルンフェルス	8.4	4.3	0.7	41.37	
546	1953	石鏃? 未成品	第2	頁岩	11.8	5.2	1.3	137.83	他器種の可能性あり
547	1953	磨製石鏃	IV B	董青石ホルンフェルス	5.2	2.9	0.2	4.77	
548	1953	石剣	山口土雄畑	ホルンフェルス	7.3	6.1	1.8	114.02	
549	1953	石剣	II G'	泥岩	5.8	4.5	1.8	74.7	
550	1953	不明	II D2	砂岩	9.1	5.8	1.6	125.8	
551	1953	不明	第2 E	砂岩	3.8	3.5	2.8	41.36	赤色付着物
552	1953	敲石		玄武岩	11.1	9.8	5.6	960	
553	1953	敲石	第4 i	玄武岩	10.2	7.9	4.2	600	
554	1953	敲石		玄武岩	10.9	8.1	4.2	600	
555	1953	敲石	I 区 A 下層	玄武岩	7.7	8.1	5.8	600	
556	1953	敲石	第3	玄武岩	10.2	7.4	4	387.59	
557	1953	敲石	第2 J	玄武岩	5.5	6.2	2.9	157.3	
558	1953	敲石	第III F 褐色層	玄武岩	13.1	8.5	5.3	960	
559	1953	敲石	第4 H 東壁	玄武岩	9.8	8.7	6.9	800	
560	1953	敲石	第2 D 3	玄武岩	8.5	9.3	2.2	379.5	
561	1953	敲石	VII 2 Z I LM 下層	凝灰岩	11	9.2	4.8	680	
562	1953	磨石	第2 E1E2	砂岩	6.8	6.7	2.4	418.5	
563	1953	磨石	第4 i	玄武岩	9.5	8	3.3	460.12	
564	1953	磨石	第2	玄武岩	10.3	8.5	6.9	900	
565	1953	磨石	II H	玄武岩	3.2	3.6	3.4	58.27	赤色付着物
566	1953	投弾		玄武岩	6.5	5	4	194.49	
567	1953	投弾	トレンチIV F 中間	玄武岩	4.5	4.3	3	96.99	
568	1953	投弾	第2 タテ穴 G	玄武岩	4.5	3.7	3	71.29	
569	1953	投弾	第2 タテ穴 G	玄武岩	3.4	3.2	1.5	38.72	
570	1953	不明	II D'	砂岩	21.5	4.3	3	418.5	
571	1953	砥石	第4	砂岩	6.3	5.9	1.6	92.87	#600
572	1953	砥石	II D3	砂岩	5.3	6	2.9	153.9	#1000以上
573	1953	砥石	第4 i	砂岩	6.6	8.7	1.5	148.04	#800
574	1953	砥石	IV表面	砂岩	8.6	4.9	3.6	208.38	#800
575	1953	砥石		砂岩	6	2.5	1.3	33.4	#1000以上
576	1953	砥石	I 貝層	砂岩	5.3	3	1.4	34.14	#1000以上
577	1953	砥石	II P	砂岩	7	4.4	2.6	152	#1000以上
578	1953	砥石	第4 STU 上層	砂岩	5.7	5.1	2.1	83.01	#1000以上
579	1953	砥石	第4 T	砂岩	6	5.7	2.2	87.68	#1000以上
580	1953	砥石	第2 タテ穴 G	砂岩	7	5.9	2	98.36	#1000以上
581	1953	砥石	IV B	砂岩	7.4	5.5	1.2	79.34	#1000以上
582	1953	砥石	第2 G	砂岩	17.1	4.8	3.6	455.26	#1000以上
583	1953	砥石	II E1	泥岩	12.6	4	2.6	182.6	#1000以上
584	1953	砥石	第2 トレンチ K	泥岩	8.5	7.5	4.9	406.11	#1000以上

No	調査年度	器種	出土地点	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
585	1953	砥石	II G ?	泥岩	9.4	2.3	1	38.3	#1000以上
586	1953	砥石	第2G	砂岩	11	5.8	2.8	275.26	#1000以上
587	1953	砥石	第2S	粘板岩	13.4	8.2	2.4	417.6	#1000以上
588	1953	砥石	第4G	砂岩	7.6	4.6	6.2	294.9	#1000以上
589	1953	石斧転用品		頁岩	9	5.4	1.5	88.61	
590	1953	層灰岩原石	STU 上層	層灰岩	8.2	8.5	2.3	214.22	
591	1954	打製石鎌		黒曜石	2.4	1.7	0.4	1.62	
592	1954	打製石鎌		黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.67	
593	1954	剥片		安山岩	7.5	3.8	1.1	30.5	
594	1954	石錘	1 M 上	砂岩	6.4	1.8	1.5	19.82	
595	1954	石錘	1 K	泥岩	6.1	1.9	1.4	21.45	
596	1954	石錘	II c	砂岩	3.4	2.1	1.8	10.2	
597	1954	大型蛤刃石斧		玄武岩	10.4	8.5	5.2	66.0	
598	1954	両刃石斧	1 H	蛇紋岩	8.6	5	2.8	183.19	
599	1954	両刃石斧	1 N	砂岩	5.1	7.4	3.1	107.21	
600	1954	両刃石斧	1 A 上層	玄武岩	10.2	5.2	3.7	299.76	
601	1954	両刃石斧	1 H 下層	玄武岩	9.6	3.9	3.6	211.62	
602	1954	片刃石斧	1 B 下層	砂岩	4.5	2.2	0.7	11.9	
603	1954	片刃石斧	立石イモ畑	頁岩	5.1	1.7	1	17.79	
604	1954	片刃石斧	1 C 下層	層灰岩	3.7	1	0.6	4.83	
605	1954	磨製石剣		粘板岩	12.8	3.3	1	60.78	
606	1954	敲石	IB 黒土層	凝灰岩	8.2	9.8	4.6	58.0	
607	1954	敲石・磨石	1B 黒土層	凝灰岩	10.6	7.9	4	453.87	
608	1954	砥石	I D 表土層	泥岩	8.5	1.9	0.9	20.9	#1000以上
609	1954	砥石	II 拡張区	泥岩	6.8	1.8	1.5	16.88	#1000以上
610	1954	砥石	1 H 黒褐	砂岩	5.5	4.9	1.2	38.4	#1000以上
611	1954	砥石	2 拡張区	石英斑岩	5.9	4.8	4.1	125.6	#400
612	1954	砥石		砂岩	8	5.9	3	146.9	#400
613	1954	砥石	1 M 黒褐	砂岩	7	8	1.1	83.1	#600
614	1954	砥石	2 拡張区	砂岩	4.5	4.7	1.3	52.9	#1000以上
615	1954	砥石	1 E 黒褐	砂岩	8.6	8.2	2.6	277	#600
616	1954	砥石	最高地点	砂岩	4.4	4.8	2.7	55.2	#600
617	1954	石製支脚	第1トレンチ C-E	玄武岩	18.8	14.3	10.5	192.0	多孔質
618	1954	石製支脚	第1トレンチ C-E	玄武岩	35.4	23.5	21.5	1012.0	多孔質
619	1961	打製石鎌	4 A	黒曜石	2.2	1.7	0.4	1.04	
620	1961	打製石鎌	4 A	黒曜石	1.6	1.6	0.4	0.85	
621	1961	打製石鎌	4 A	黒曜石	2	1.1	0.45	0.77	
622	1951	両刃石斧	e	玄武岩	15.9	5.2	3.2	501.34	
623	1961	片刃石斧	II - ?	砂岩	10.3	6	1.5	144.1	
624	1961	両刃石斧	1 F	砂岩	8.5	4.6	1.7	80.63	
625	1961	石斧		玄武岩	8.6	5.3	3	221.1	
626	1961	石斧未成品?	1 C	砂岩	11.1	7.2	2.1	196.56	
627	1961	片刃石斧未成品	1 S 上層	頁岩	9.9	3.5	3	118.7	
628	1961	石斧未成品?	5 E	ホルンフェルス	7.1	4.9	2	104.7	
629	1961	片刃石斧未成品	1 M 下層	層灰岩	7	3.9	2.6	115.9	
630	1961	石斧	1 E	泥岩	8.2	3.5	2.3	77.51	
631	1961	扁平片刃石斧		層灰岩	5.2	2.2	1	17	
632	1951	柱状片刃石斧	G 第2F	泥岩	13.9	3.7	3.2	322.78	
633	1951	石庖丁未成品	N	董青石ホルンフェルス	13.2	7.5	1	150.62	
634	1951	石鎌	表面採集	董青石ホルンフェルス	5.8	4.8	0.6	27.3	
635	1951	不明石製品	F	緑色岩	5.1	2.2	1.5	31.5	
636	1961	磨製石鎌	1 S	頁岩	4.1	2.4	0.4	14.9	
637	1951	磨製石剣	R	泥岩	5.1	3.2	0.9	13.1	
638	1951	磨製石剣	PQ1	泥岩	3.8	4	1.1	23.7	
639	1961	磨製石剣	1 R 上層	粘板岩	6.8	2.8	0.9	17.7	
640	1961	磨製石剣	1 W 上層	頁岩	4.8	3.7	1.1	27.5	
641	1961	磨製石剣	5 C	頁岩	3.7	3.3	0.8	10.8	
642	1961	磨製石剣未成品	1 Q 下層	層灰岩	3.6	3.4	1.1	21.56	
643	1961	磨製石剣	1 G	頁岩	5.2	2.8	1.1	19.1	
644	1961	石剣未成品?	1 G	安山岩	8.1	4.8	2	95.42	
645	1961	磨製石剣未成品	中 ni	頁岩	9.1	4.5	1.8	92.7	
646	1961	磨製石剣	1 C 表層下	董青石ホルンフェルス	5.3	3.7	0.6	14	
647	1951	磨製石剣	F I	砂岩	5.7	2.5	1	26.2	
648	1961	敲石	1 X 下	玄武岩	13.7	11.1	5	128.0	
649	1961	敲石	1 W	玄武岩	10.7	8.2	6.6	90.0	
650	1961	敲石	中 e	玄武岩	13	10.2	4.5	98.0	
651	1961	敲石	1 W	玄武岩	12.6	11.2	7.1	154.0	
652	1961	敲石	1 E 表採	玄武岩	11.2	9.1	5.5	92.0	
653	1961	敲石	1 A	玄武岩	9.3	6.5	4.6	44.0	
654	1961	敲石	1 N 上層	玄武岩	10.3	8.9	5	72.0	
655	1961	敲石	1 S-T 下層	玄武岩	11.1	8.7	5.8	92.0	
656	1961	敲石	1 S-T 焼土内	玄武岩	10.5	9	5.5	90.0	
657	1961	敲石	1 B	玄武岩	13.1	9	3.8	74.0	

No	調査年度	器種	出土地点	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
658	1961	敲石	1 S 上層	玄武岩	12.4	9.8	5.5	1080	
659	1961	敲石	4 D 上層	玄武岩	9.9	9.1	5.3	760	
660	1961	敲石	1 区表採	玄武岩	11.8	9.8	5.7	1000	
661	1961	敲石	1 B	玄武岩	11.8	6.6	4.8	500	
662	1961	台石	1 S 上層	玄武岩	16.5	13.5	6.4	2240	
663	1961	磨石	1 A	玄武岩	10.5	8.4	5.3	740	
664	1961	磨石	1 X 上層	玄武岩	17.8	6.3	4	740	
665	1961	磨石	1 A	玄武岩	9.6	9	6.2	800	
666	1961	磨石	1 F	玄武岩	9.8	7.9	4.8	560	
667	1961	磨石	1 区表採	玄武岩	11.2	10.4	5.2	860	
668	1961	砥石		砂岩	4.2	3.3	2.3	48.39	#1000以上
669	1961	砥石		砂岩	5.6	4.8	1.4	38.6	#1000以上
670	1961	砥石		砂岩	5.2	4.4	1.5	41.2	#1000以上
671	1961	砥石	D 1	砂岩	5.3	2.2	2.2	45.53	#1000以上
672	1961	砥石	1 W	砂岩	8.2	6	4.8	414.4	#1000以上
673	1961	砥石	1 E	砂岩	6.9	4.7	1.4	54.4	#1000以上
674	1961	砥石	1 F	砂岩	7.8	5.5	7.9	409.9	#1000以上
675	1961	砥石		砂岩	7.6	5.4	1.3	81.3	#1000以上
676	1961	砥石	4 D	砂岩	8.6	11	6	720	#320
677	1961	砥石	1 D	砂岩	6.7	3.9	3.9	172.48	#1000以上
678	1961	砥石	1 P 上層	砂岩	6.2	2.7	2.8	61.27	#800
679	1961	砥石	5 G	泥岩	13.8	6.8	4.4	720	#1000以上
680	1961	砥石	1 WX	砂岩	4.2	4.9	1.1	31.5	#1000以上
681	1961	砥石	1 区表採	砂岩	11.4	12.7	6.6	1200	#400
682	1961	砥石	1 S 下層の下	砂岩	5.7	5.8	4.3	219.42	#1000以上
683	1961	砥石	1 J	泥岩	13.3	2.6	1.4	74.9	#1000以上
684	1961	砥石	1 O 上層	砂岩	7	6.6	2.2	109.74	#1000以上
685	1961	砥石	東 i	砂岩	4.8	4.1	0.8	25.14	#1000以上
686	1961	砥石	東 f ii	砂岩	7.7	9.9	5.2	450.9	#1000以上
687	1961	砥石	5 上層	花崗岩	7.8	12.4	8.9	920	#1000以上
688	1961	砥石	4 D	砂岩	5.2	11.4	1.5	134.26	#1000以上
689	1961	砥石	2 F 下層	砂岩	9.5	3.9	3.8	155.43	#400
690	1961	砥石	1 R 上層	泥岩	7.9	4.2	0.8	39.1	#1000以上
691	1961	砥石	4 D 上	砂岩	3.5	4.7	2.3	47.61	#800
692	1961	砥石	1 G	砂岩	8	8	4	382.2	#1000以上
693	1961	砥石	1 M	泥岩	3.9	3.3	1.9	37.5	#1000以上
694	1961	砥石	1 S 上層	砂岩	6	4.4	2.4	104.6	#600
695	1961	砥石	1 N 下層	砂岩	17.3	12.8	12.5	3000	#600
696	1961	砥石	ゴマ畑	砂岩	13.6	14.7	5.5	1360	#1000以上